

神 前 遺 跡

—秋月海南線道路改良に伴う発掘調査報告書—

2014 年 8 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

神 前 遺 跡

—秋月海南線道路改良に伴う発掘調査報告書—

2014 年 8 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

和歌山市神前に所在する神前遺跡は、和歌山平野の南東部に位置し、和田川の自然堤防上に立地します。

県道秋月海南線道路改良に先立ち平成 21 年度から 3 カ年にわたり実施した発掘調査では、弥生時代の集落跡や室町時代から近世の屋敷跡など多くの遺構・遺物が発見され、平成 25 年度に発掘調査報告書として発刊いたしました。

このたび、これに引き続き、前回の調査区の東西隣接地で発掘調査を実施いたしました。遺跡の南辺部の調査でしたが、前回の発掘調査で発見された弥生時代の溝の続きとともに弥生時代の土壌、中世の溝や掘立柱建物跡が発見されています。

狭い発掘調査区ではありましたが、これらの調査成果は神前遺跡に関する資料を蓄積することとなりました。これらの資料は、和歌山の歴史を考えるうえでも重要な資料となることが期待されます。

最後になりましたが、本発掘調査の実施にご協力いただきました関係者、周辺住民の方々に感謝を申し上げます。

平成 26 年 8 月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 工 楽 善 通

例 言

1. 本書は和歌山市神前に所在する神前遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、和歌山県海草振興局による秋月海南線道路改良工事に伴い、平成 25 年度に 9 区の発掘調査、平成 26 年度に 10 区の発掘調査及び 9・10 区の出土遺物等整理を実施した。
3. 業務は、下記の調査組織のもと実施した。

9 区	調査主体	和歌山県教育委員会	教 育 長	西 下 博 通
	事 務 局	生涯学習局文化遺産課	課 長	川 端 真 理
			副 課 長	松 本 幸 久
			調査班長	黒 石 哲 夫
	調査担当	生涯学習局文化遺産課	技 師	田 中 元 浩
10 区	調査主体	公益財団法人 和歌山県文化財センター	技 師	上 地 舞
			理 事 長	工 楽 善 通
			専務理事	里 森 修
	事 務 局		事務局長	嶋 田 文 紀
			埋蔵文化財課 課 長	井 石 好 裕
	調査担当	埋蔵文化財課	管理課 主 査	松 尾 克 人
			主 査	高 橋 智 也

4. 実測図及び地区割りは、平成 14 年国土交通省告示第 9 号により定められた平面直角座標系第 VI 系を使用し、数値は「m」単位で表示している。
5. 標高は、東京湾標準潮位（T.P.）を使用した。
6. 発掘調査で使用したコードは以下のとおりである。出土遺物・記録資料はこの調査コードを用いて管理している。 発掘調査コード ： 13 - 01・307
7. 遺構番号については、9 区は 8 区の続きであるため 8 区の番号を踏襲し、10 区は 6・7 区と分断されるため、別の番号を付与した。また、出土遺物番号は、9 区・10 区を通して連番で付与した。
8. 遺構図の縮尺は、原則として調査区平面図を 1/250、調査区土層断面図を 1/60、個別遺構図を 1/60～1/100、遺物実測図を 1/4 とし、必要に応じてそれ以外の縮尺を用いた。
9. 本報告書の執筆は、和歌山県教育委員会と公益財団法人和歌山県文化財センターが分担した。執筆分担は、目次に示した。
10. 当事業で作成した図面・写真・台帳類は和歌山県教育委員会（9 区）及び公益財団法人和歌山県文化財センター（10 区）が保管している。出土遺物は和歌山県教育委員会が所有・保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯と経過 1

第1節 調査に至る経緯 (高橋・上地)..... 1

第2節 調査の経過 (高橋・上地)..... 1

第2章 位置と環境 2

第1節 地理的環境 (高橋)..... 2

第2節 歴史的環境 (高橋)..... 2

第3章 調査の方法 3

第1節 地区割りの設定 (高橋)..... 3

第2節 調査区 (高橋)..... 4

第3節 調査の手順 (高橋)..... 4

第4章 発掘調査成果 4

第1節 基本層序 (高橋・上地) 4

第2節 9区の調査 (上地) 5

第3節 10区の調査 (高橋) 9

出土遺物観察表

写真図版

報告書抄録

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

埋蔵文化財包蔵地「井辺遺跡」及び「神前遺跡」内で、和歌山県により県道和歌山橋本線、秋月海南線、松島本渡線道路改良工事が計画された。これを受け和歌山県教育委員会によって実施された平成21年2月からの確認調査の結果、道路改良工事予定地内に埋蔵文化財が展開することが判明し、記録保存目的の本発掘調査が必要と判断された。

これを契機として、公益財団法人和歌山県文化財センターが発掘調査を受託し、和歌山県1次～4次調査が平成21年（2009）～平成24年（2012）まで現地調査が実施された。その後、整理期間を経て平成26年（2014）に発掘調査報告書が刊行されている。

しかしながら、道路改良工事の計画が部分的に変更されたことにより一部の工事範囲が当初よりも東西に広がることとなり、追加の本発掘調査が必要となったため、その部分（9区・10区）の本発掘調査を実施することとなった。

平成25年9月25日付け海建工第76号で和歌山県知事により文化財保護法第94条第1項に基づき通知が提出された。これに対し、平成25年10月7日付け文第99号の（48）で本発掘調査が必要である旨の通知を和歌山県教育委員会が行った。

その後、神前遺跡に該当する範囲について、平成25年12月5日付け海建工第115号で海草振興局建設部長より和歌山県教育委員会に発掘調査の依頼があり、平成25年12月20日付け文第210号の（13）で和歌山県教育委員会がこれを受諾した。9区については、調査完了までに緊急を要しかつ調査面積が小規模であったため、事業者と協議の上、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課で海南秋月線道路改良工事に伴う神前遺跡発掘調査として実施した。

10区については、公益財団法人和歌山県文化財センターが平成26年3月19日付けで和歌山県海草振興局と委託契約を締結し調査を実施した。なお、これに伴い、文化財保護法第92条第1項に基づき平成26年4月11日付け和文セ第39号で和歌山県教育委員会へ埋蔵文化財発掘調査の届出を行っている。

第2節 調査の経過

9区の発掘調査は、和歌山県教育委員会が平成26年1月7日から平成26年1月31日まで実施した。発掘調査工事は、株式会社三笠建設が委託者である和歌山県海草振興局より請け負って実施された。

また、10区の発掘調査は、公益財団法人和歌山県文化財センターが和歌山県海草振興局の委託を受け、平成26年5月19日から平成26年6月13日まで実施した。なお、掘削作業等の発掘調査工事は、9区と同様に株式会社三笠建設が委託者である和歌山県海草振興局より請け負って実施された。出土遺物は遺物収蔵コンテナ（28ℓ）5箱であり、平成26年6月19日付け和文セ

第 109 号で遺失物法第 4 条第 1 項に基づき和歌山東警察署へ埋蔵文化財発見届を提出した。

現地調査後は引き続き、公益財団法人和歌山県文化財センターが、9 区・10 区両方の出土遺物の注記・接合・登録作業・出土遺物の実測等を実施し、発掘調査報告書を作成した。なお、報告書の執筆については、和歌山県教育委員会と公益財団法人和歌山県文化財センターが分担して行っている。

第 2 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

神前遺跡は、和歌山平野の南東部に位置する。三波川帯の一角である岩橋山塊に連なる福飯ヶ峯の西麓に展開する遺跡である。和田川により形成された後背湿地の北西部に隣接する氾濫平野の一角に所在する。現在は徐々に住宅地化が進んでいるが、少し前までは田畑が広がっていた地域である。遺跡の中心を南北に貫く宮井用水が周辺の田畑を潤している。

調査区は、遺跡南端部に位置し、9 区が県第 4 次調査 8 区の西側、10 区が 6・7 区の東側にあたる。調査以前の現況は、北東から南西へと緩やかな傾斜をもつ水田であった。

第 2 節 歴史的環境

神前遺跡周辺は、旧石器時代においては、丘陵裾部で石器の発見地点がわずかに知られているだけであるが、縄文時代に入ってから、丘陵裾部で鳴神貝塚、吉礼貝塚、岡崎遺跡等が出現する。

弥生時代になると、沖積平野が発達したことに端を発し、太田・黒田遺跡のような大規模集落遺跡が出現する。これらの弥生時代集落は弥生時代中期に最盛期を迎えるが、その後は衰退し平野部での遺跡が激減する。これを境に滝ヶ峰遺跡等の高地性集落が出現するが、弥生時代後期になると、再度平野部に遺跡の展開が見られるようになる。

古墳時代に入ると、秋月遺跡に前方後円墳、井辺遺跡に前方後方墳が築造される等、神前遺跡周辺において多くの古墳が造成されるようになる。特に古墳時代中期遺構は、遺跡西側に位置する岩橋山塊に 850 基の古墳からなる岩橋千塚古墳群が形成される。

古代には、秋月遺跡周辺に造営されたと考えられる日前・国懸神宮を初めとし、竈山神社等が



図1 調査区 位置図

所在するなど、多くの式内社が分布する地域でもある。

中世以降も太田・黒田遺跡や鳴神遺跡で遺構や遺物が認められており、神前遺跡においても室町時代から近世にかけて、雑賀五組のうちの社家郷に属する神前氏の屋敷跡が確認されている。



図2 周辺の遺跡

第3章 調査の方法

第1節 地区割りの設定

発掘調査の実施に伴う地区割りの設定に当たっては、県第4次調査の地区割りを踏襲した。平成14年国土交通省告示第9号により定められた東経136度0分0秒、北緯36度0分0秒を原点とする平面直角座標系第Ⅵ系を使用し、次のように地区割りを設定した。

基点を $X = -198.0\text{km}$ 、 $Y = -72.0\text{km}$ とし、この基点から100 m四方の区画の中区画を設定した。中区画は北東端を基点として西方向へA～J、南方向へ1～10の記号を付し、これを組み合わせて区画名を表記する。また、中区画内を4 m四方に分

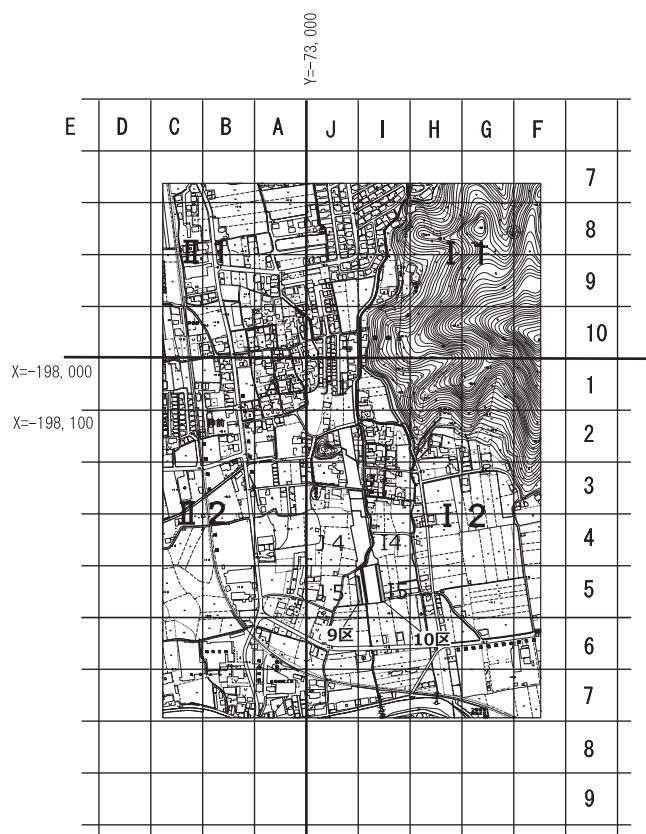


図3 地区割りの設定

割した小区画を設定した。小区画は中区画の北東端を基点として西方向へ a ～ y、南方向へ 1 ～ 25 の記号を付し、これを組み合わせて区画名を表記する。

なお、地区割りは出土遺物の取り上げ及び記録図面の基準として使用している。

この地区割りにおいて、9 区は I5 - x19・y12 ～ y19・J5 - a5 ～ a18・b4 ～ b13・c4 ～ c6、10 区は I4 - q25・r22 ～ r25・s23 ～ s25・I5 - o13 ～ o18・p7 ～ p18・q1 ～ q13・r1 ～ r7 に含まれる。

第 2 節 調査区

9 区は 8 区の西側に位置し、東西 1 ～ 6 m、南北約 65 m の調査区で、調査面積は 298m²である。また、10 区は 6・7 区の東側に位置し、東西 4.5 m、南北 82.0 m の調査区で、調査面積は 325m²である。なお、両方の調査区とも南北座標軸より約 10 度西偏している。

第 3 節 調査の手順

現代造成土（0 層）及び近現代耕作土（I 層）（遺物包含層が残存していない場合は、遺構面上 10cm まで）をバックホウを用いて除去した後、遺物包含層を人力により遺構面まで掘削して遺構を検出した。遺構検出後は人力により遺構埋土の掘削を行い、遺物出土状況及び遺構の把握に努めた。なお、掘削に当たっては、適切な場所に土層観察用のベルトを残す等、遺構の状況を把握しながら慎重に掘削を行った。

これらの調査の記録として、記録写真の撮影と記録図面の作成を行った。記録図面については、調査員・調査補助員により 1/100 の遺構配置図、1/20 又は 1/10 の遺構図、遺物出土状況図及び土層堆積状況図を作成した。また、記録写真についてはモノクロ及びカラーリバーサルフィルムを用い、6 × 7 版カメラ及び 35mm カメラで撮影を行い、1,000 万画素相当のデジタルカメラを補助的に使用した。

第 4 章 発掘調査成果

第 1 節 基本層序

調査区の現況は田及び果樹園である。

基本層序は県第 4 次調査と同様であり、現代造成土【0 層】、近現代耕作土【I 層】、遺物包含層（近世）【II 層】、遺物包含層（中世～近世初頭）【III 層】、遺物包含層（弥生時代）【IV 層】、基盤層【V 層】である。なお、10 区については、II ～ IV 層は確認されず、I 層直下が基盤層となる V 層であり、この上面で全ての遺構を検出した。I 層直下の遺構面及び遺構埋土は、長期の水田経営に伴うマンガンの沈着により明褐色に変化しており、この上面での遺構検出は困難であったことから、この部分を除去した段階で遺構を検出している。このマンガン沈着部分については、一つの層（I' 層）として捉えて土層断面図を作成した。また、9 区については、県第 4 次調査の土層を参照したため、新たな土層断面図は作成していない。

第2節 9区の調査

1 概要

今調査区で検出された遺構は、県第4次調査で検出された鎌倉時代及び弥生時代の溝群の延長部分と今調査区で新たに検出された弥生時代の溝群に分かれる。本報告では、後者を中心に報告する。なお、前者を含めた遺構の詳細については表1にまとめた。

2 弥生時代の遺構・遺物

(1) 弥生時代前期～中期の落ち込み・溝（下層遺構面の遺構）

8000 落ち込み・8002 溝

8000 落ち込みは9区北で検出された自然地形の落ち込みで、残存幅9.5～16.5 m、検出面からの深さ0.2～0.6 mを測る。落ち込みは、東から西にむかって緩やかに浅くなることから9区西側調査区外にて収束するものと考えられる。遺物は、貼り付け突帯をもつ甕とみられる弥生土器片などが出土している。8002 溝は、8000 落ち込み北側肩部に掘削された溝で、断面形は逆台形を呈し埋土は大きく上層、中層、下層の3層に分けられる。下層にて、多条化したヘラ描沈線文をもつ弥生土器壺などが出土している。

(2) 弥生時代前期～庄内期の溝、鎌倉時代の溝（上層遺構面の遺構）

8076 溝・8077 溝・8099 溝

いずれも9区南で検出された溝である。8076 溝は、検出幅約0.3 m、検出面からの深さ約0.1 mを測り、埋土は2層に分層可能で、時期は埋土の色調などから弥生時代中期の遺構である可能性が考えられる。8077 溝及び8099 溝は、いずれも8008 溝と重複し、切合い関係から8077 溝は8008 溝より古く、8099 溝は8008 溝より新しい。8077 溝は、北東から南西方向に延びる溝で、検出幅約0.5m、検出面からの深さ約0.1 mを測る。遺物は、弥生土器底部片が出土している。8099 溝は、北西から南東にむかって延びる溝で、検出幅約0.3m、検出面からの深さ約0.1mを測る。時期は、埋土の色調などから弥生時代中期の遺構である可能性が想定される。

8078 溝・8079 溝

いずれも北東から南西にむかって延びる溝である。8078 溝は、検出幅約0.45m、検出面からの深さ約0.1mを測り、8079 溝は検出幅約0.5～1.0m、検出面からの深さ約0.1mを測る。ヘラ描沈線文をもつ弥生土器壺が出土していることから8079 溝は、弥生時代前期末葉に属する可能性がある。

8089 溝・8090 溝

9区南西で検出された近接する溝または土坑である。8089 溝は、検出幅約0.6m、検出面からの深さ約0.1m、8090 溝は検出幅約0.7m、検出面からの深さ約0.2mを測る。いずれも埋土は褐灰色シルト単層で、時期は弥生時代中期に属する可能性が想定される。

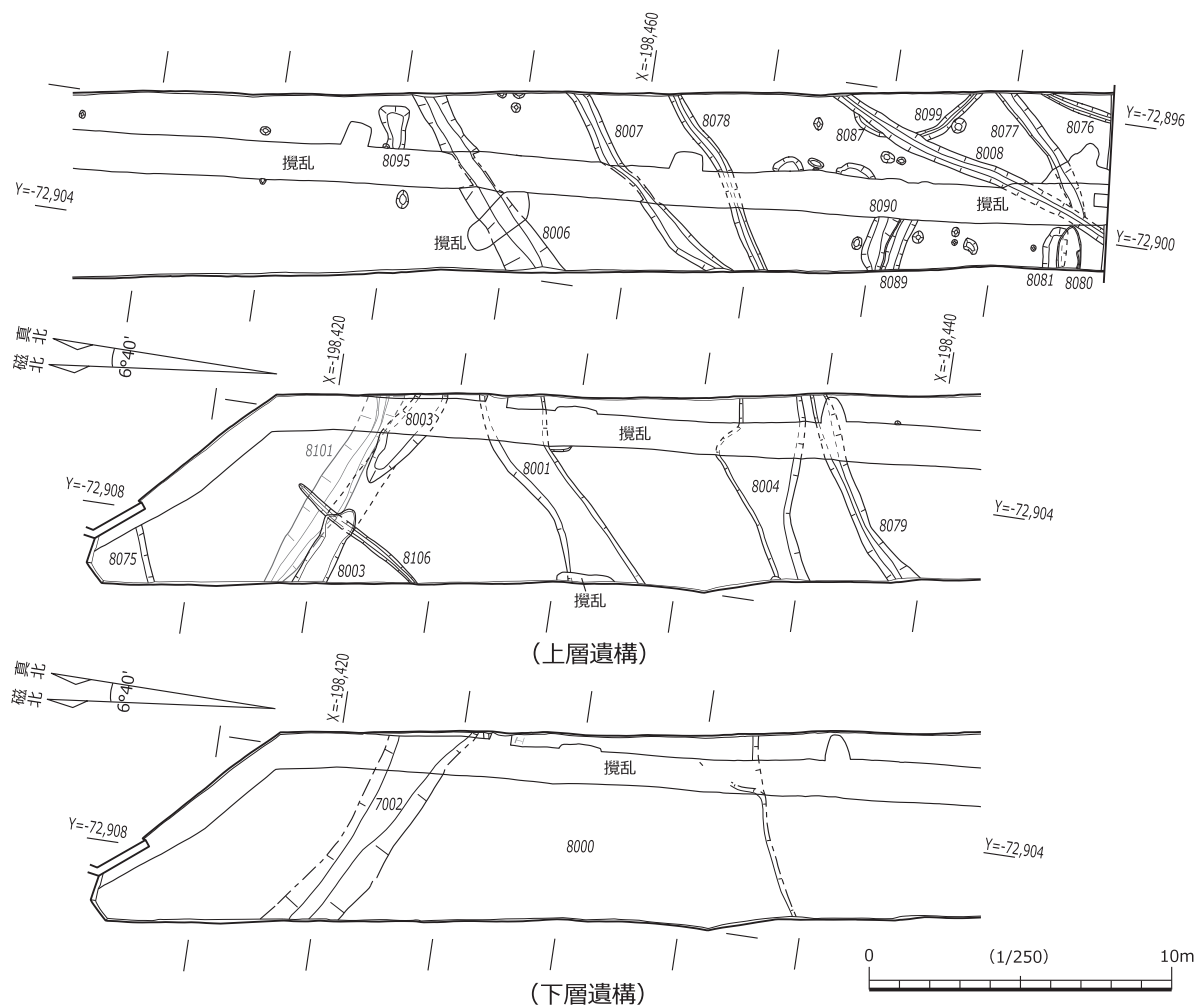


図4 9区 遺構配置図

8106 溝

9区北で検出された溝で、8003 溝及び 8101 溝と重複する。切合い関係から 8106 溝は 8003 溝より古く 8101 溝より新しい。溝は、検出幅約 0.5m、検出面からの深さ約 0.1m を測り、埋土は灰色シルト単層からなる。時期は、8003 溝及び 8101 溝との切合い関係から弥生時代前期末葉～中期前葉と考えられる。

3 まとめ

調査の結果、上層遺構面において、県第 4 次調査から延びる鎌倉時代の溝及び弥生時代の溝群、落ち込み等の延長部分を検出するとともに、新たに弥生時代の溝群を検出した。

遺物が少なく確定的でないが、後者のうち 8077 溝・8079 溝・8106 溝については弥生時代前期末葉～中期中葉、その他については弥生時代中期におさまるものと考えられる。また、下層遺構面にて弥生時代前期末葉にあたる 8000 落ち込み・8002 溝を検出した。落ち込みは、西から東へと緩やかに浅くなり 9 区西側調査区外で収束するものと想定される。

表1 遺構の詳細

遺構番号	遺構種類	検出幅(m)	検出面からの深さ(m)	出土遺物	時期
8000	落ち込み	13	0.1~0.6	弥生土器甕	弥生時代前期末葉~中期前葉
8001	溝	2.0	0.1	なし	弥生時代中期中葉
8002	溝	9.5~1.6	0.2~0.6	弥生土器壺	弥生時代前期末葉
8003	溝	0.9	0.1	弥生土器片	弥生時代前期末葉
8004	溝	1.1~2.8	0.6	弥生土器細片	弥生時代後期または庄内期
8006	溝	0.8~2.0	0.3	なし	鎌倉時代
8007	溝	0.8	0.1~0.2	なし	弥生時代中期
8008	溝	0.5~0.7	0.4	弥生土器底部片	弥生時代中期
8072	溝	1.8	0.2	なし	鎌倉時代
8076	溝	0.3	0.1	土器細片	弥生時代中期か
8077	溝	0.5	0.1	弥生土器片	弥生時代前期末葉~中期前葉
8078	溝	0.45	0.1	なし	弥生時代中期か
8079	溝	0.5~1.0	0.1	弥生土器壺	弥生時代前期末葉
8089	溝か	0.6	0.1	なし	弥生時代中期か
8090	溝か	0.7	0.2	なし	弥生時代中期か
8099	溝	0.3	0.1	なし	弥生時代中期か
8101	溝	1.2	0.1	弥生土器壺・甕、石器か	弥生時代前期末葉~中期中葉
8106	溝	0.5	0.1	なし	弥生時代前期末葉~中期前葉

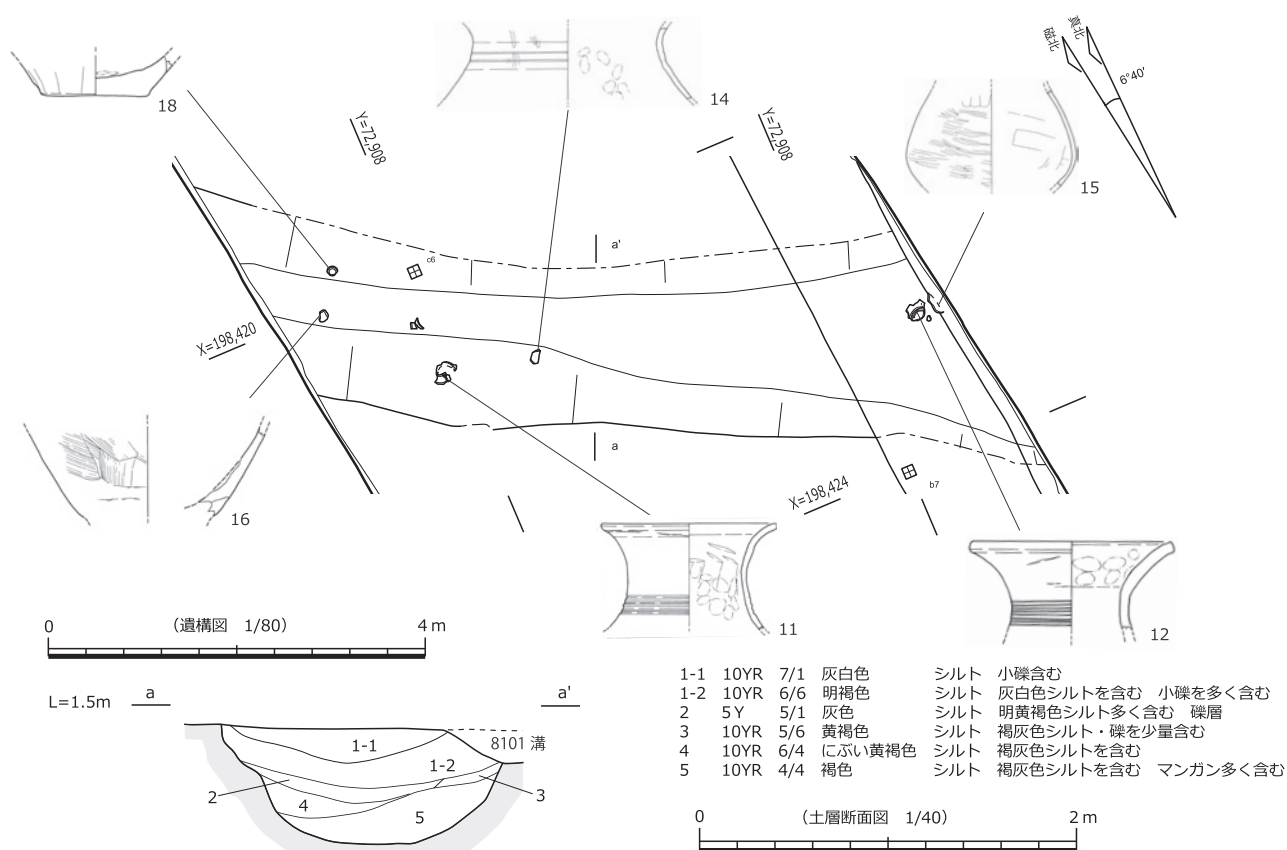


図5 8002溝

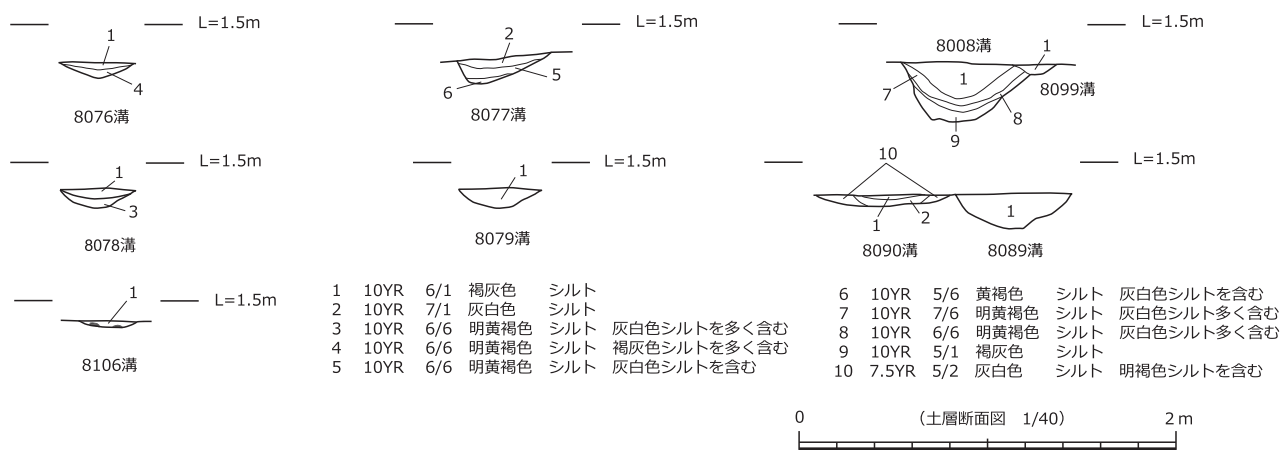


図6 検出遺構

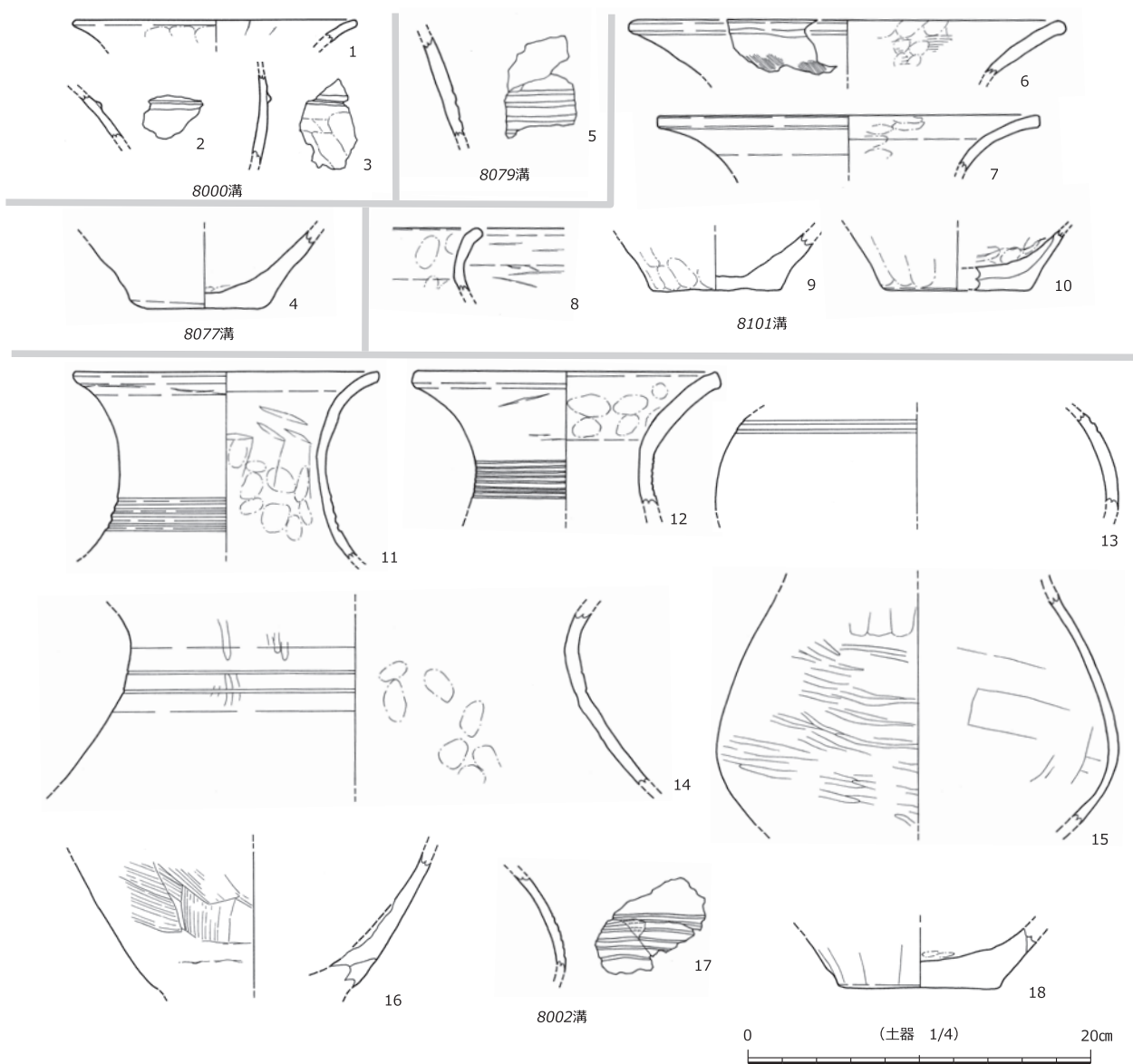


図7 9区 出土遺物

第3節 10区の調査

10区は、県第4次調査6・7区の東側に位置し、東西約4m、南北約80mの長細い調査区である。遺物包含層は残存しておらず、遺構は全てV層上面で検出された。4時期の遺構が混在しており、最上層が中世、上層・中層遺構が弥生時代中期、下層遺構が弥生時代前期に帰属すると考えられる。なお、上層・中層遺構には、遺構の重複関係があるが、明確な時期差は認められない。

1 弥生時代の遺構（上層・中層・下層遺構）

(1) 10029溝・10030溝・10034溝・10035溝の重複状況（図8）

10029・10030・10034が上層遺構、10035が中層遺構である。10035が埋没した後に、上層遺構が掘り込まれている。上層遺構からは遺物がほとんど出土しないが、深さが0.15～0.2mであることから、遺構上部が後世の水田経営によって削平された結果である可能性が高い。いずれの遺構も底面は均整でなく、底面標高がほぼ同一であることから、10029・10034・10030は、本来は一体の自然流路であった可能性もある。

10029溝（上層遺構）（図8・9）

幅1.5～1.8m、深さ0.15～0.2mを測る。遺構断面形は底面が広い台形状を呈しているが、底面は均整ではなく、凹凸がある。7区7012に接続すると考えられる。弥生時代中期の土器片(19・20・21)が出土している。

10034溝（上層遺構）（図8）

幅0.3～0.5m、深さ0.15mを測る。10029及び10030遺構南肩に挟まれるように並行する。7

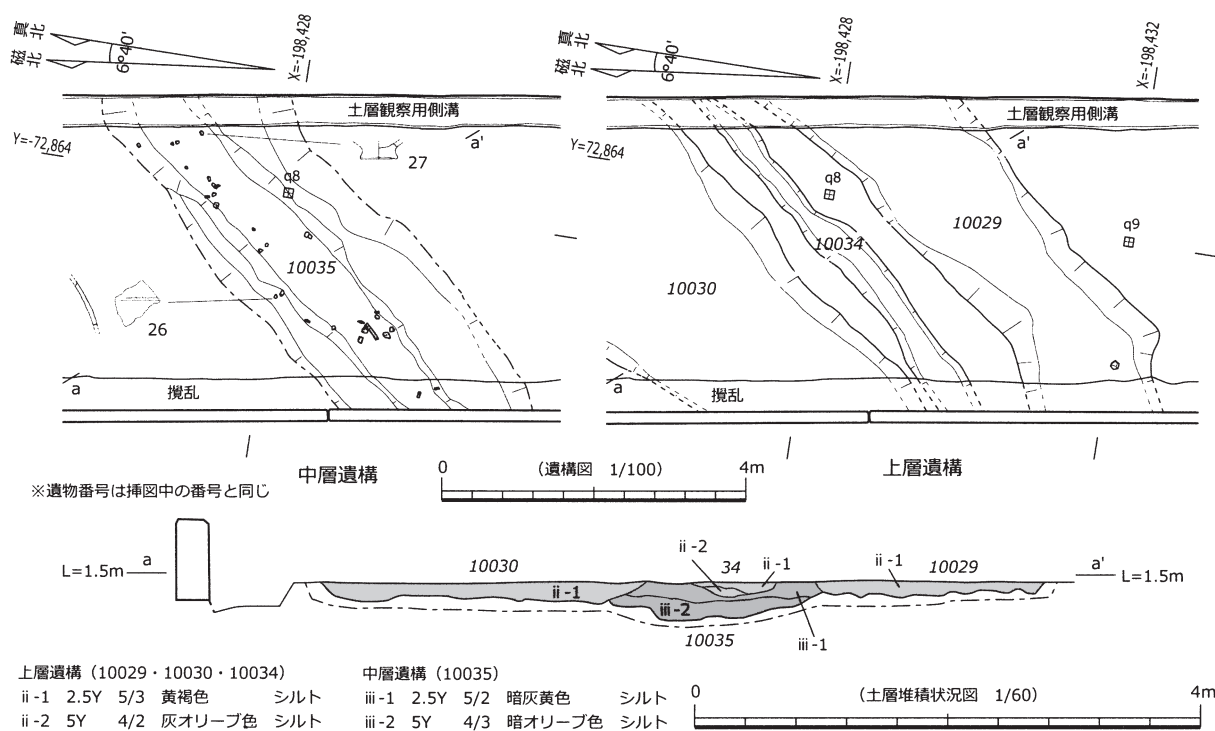


図8 10029溝・10030溝・10034溝・10035溝 重複状況

区 7011 に接続すると考えられる。

10030 溝（上層遺構）（図 8・9）

幅 2.5 m 以上、深さ 0.2 m を測る。遺構断面形は底面が広い台形状を呈しているが、底面は均整ではなく、凹凸がある。南側遺構肩は遺構 10029・10034 と並行しているが、北側遺構肩は南－北方向から北東－南西方向へと方向を変え、下流に行くほど遺構幅は狭くなる。10034 と合流し、7 区 7011 に接続すると想定される。

10035 溝（中層遺構）（図 8・9）

残存幅 1.7 ～ 2.2 m、残存深さ 0.3 m を測る。遺構肩は上層遺構の 10029・10030 に切られて残存していない。断面形は基本的に皿状を呈するが、中心部分が若干くぼんだ状況となり、溝状を呈する。県第 4 次調査では、これに明確に接続すると考えられる遺構は確認されていないが、同時期の 10036 と合流した上で、7 区 7002 に接続する可能性も考えられる。弥生土器（24 ～ 28）が出土したが、いずれも破片であり磨滅が激しい。

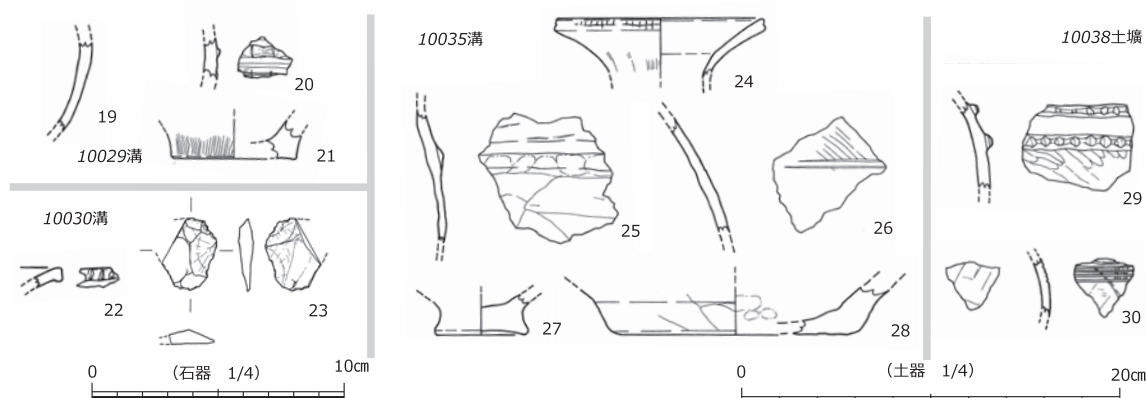


図9 10029溝・10030溝・10035溝・10038土坑 出土遺物

(2)10030 溝・10031 溝・10036 溝・10053 溝の重複状況（図 10）

10030・10031 が上層遺構、10036 が中層遺構である。10036 が埋没した後に、10030・10031 が掘り込まれている。10029 他と同様、遺構上部は後世の水田経営によって削平されている可能性が高い。なお、10036 の下から 10053 が検出されている。10030 は前述のとおりである。

10031 溝（上層遺構）（図 10・12）

遺構の方向が、北西－南東方向から北－南方向、更に北西－南東方向に変化する。幅 0.6 ～ 1.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m を測り、北側では幅が更に広がると想定される。7 区 7010 に接続すると考えられる。底面には凹凸が見られる。紀伊型甕の可能性のある弥生土器（31）が出土したが磨滅が激しく、混入品と考えられる。

10036 溝（中層遺構）（図 10・12）

北北東－南南西から北東－南西へ方向を変える不整形な遺構である。幅 2.2 ～ 2.5 m、深さ 0.25

mを測るが、南側ではそれよりも幅が広がる傾向にある。遺構中心付近から南側に向け、幅0.7mで溝状となっている。この部分が、7区7002に接続するものと考えられる。

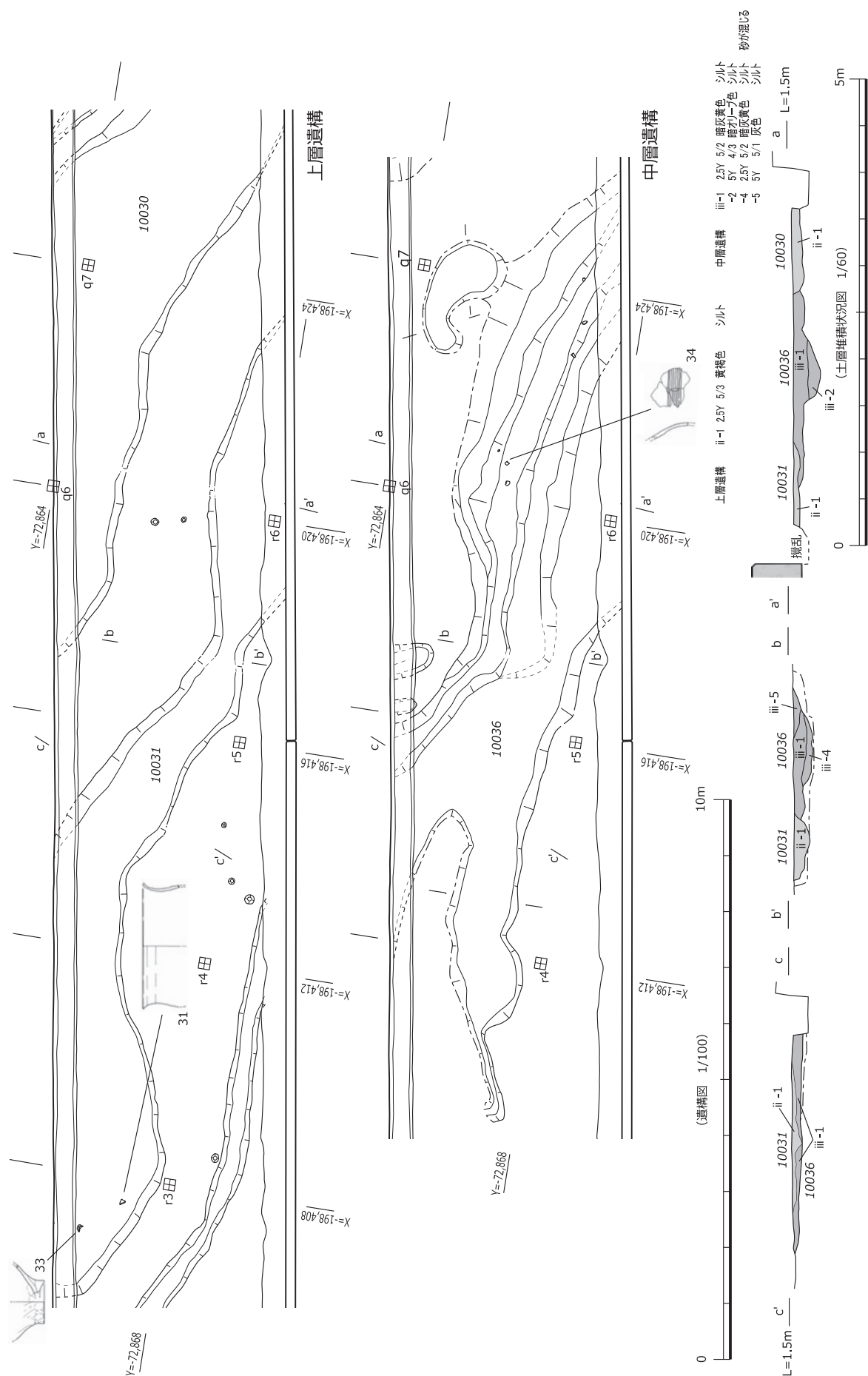


図10 10030溝・10031溝・10036溝 重複状況

また、遺構北側では2方向から延びる溝が1つに合流する。このうち西側の溝は、北側が10031・10043に切られて残存していない。

10053 溝（下層遺構）（図 11・12）

10036 の下層で検出された溝状遺構である。北東側から延びる溝が、途中で南西方向と西南西方向に分岐する。南西方向の溝は途中で止まるが、西南西方向の溝は調査区外に延びる。底面に凹凸が見られることから自然流路の一部である可能性が高いが、西南西方向の溝は幅0.4～0.6m、深さ0.2mの断面V字を呈する遺構であり、人為的に

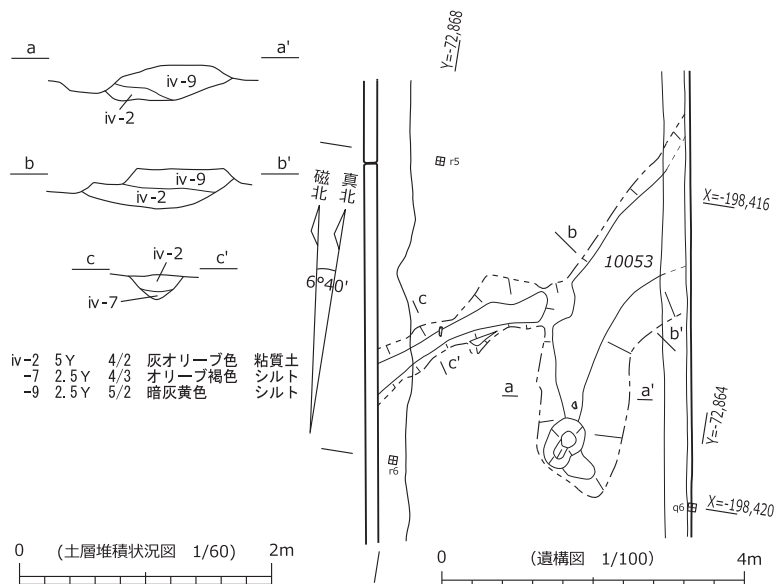


図11 10053溝

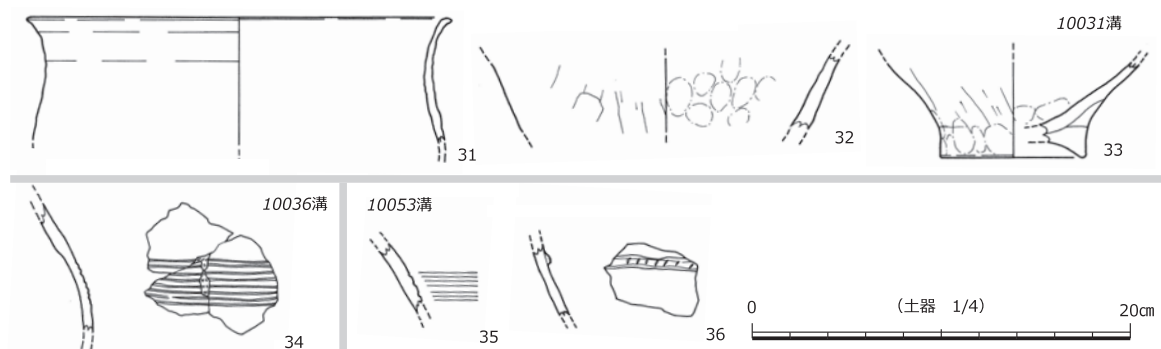


図12 10031溝・10036溝・10053溝 出土遺物

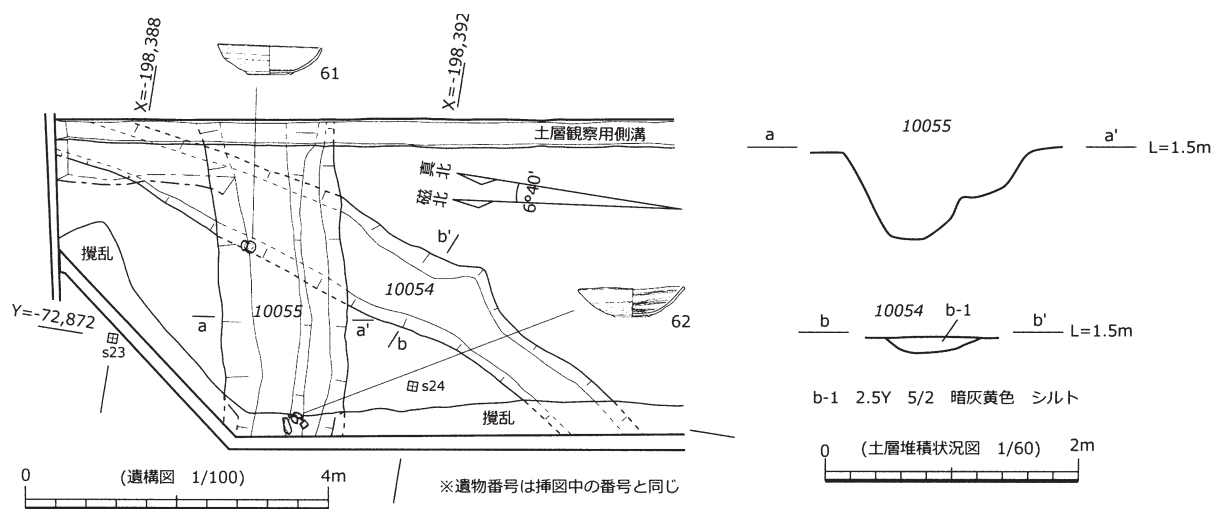


図13 10054溝・10055溝 重複状況

掘削された溝と考えられる。県第4次調査では、この遺構に接続する遺構は検出されていない。

(3)10055 溝・10054 溝・10056 溝の重複状況 (図13・14)

10055 が最上層遺構、10054 が上層遺構、10056 が下層遺構である。10056 が埋没した後に、10054 が掘り込まれ、10054 が埋没した後相当の時間を経て 10055 が構築されている。10054 は、他の上層遺構と同様、遺構上部が後世の水田経営によって削平されている可能性が高い。

10054 溝 (上層遺構) (図13)

北北東－南南西方向の幅 0.7 ～ 1.1 m、深さ 0.15 m を測る溝状遺構である。遺構断面形は皿状を呈している。6 区 6015 ・ 7 区 7051 に接続すると考えられる。

10056 溝 (下層遺構) (図14)

県第4次調査で検出された幅 11.5 m の溝状遺構の南側遺構肩部分を検出した。幅 2.9 m、深さ 0.9 m 程度が検出されたが遺構底までは至っていない。遺構肩は、なだらかに落ち始めるが、深さ 0.2 m 程の場所で幅 0.4 ～ 0.7 m のテラス状となり、その後、傾斜に変化はあるものの徐々に下がっていく。遺物の出土は散漫であり、弥生時代前期の遺物が風化した状態で出土したのみである。8 区 8000 ・ 6 区 6050 ・ 7 区 7000 に接続するものと考えられる。

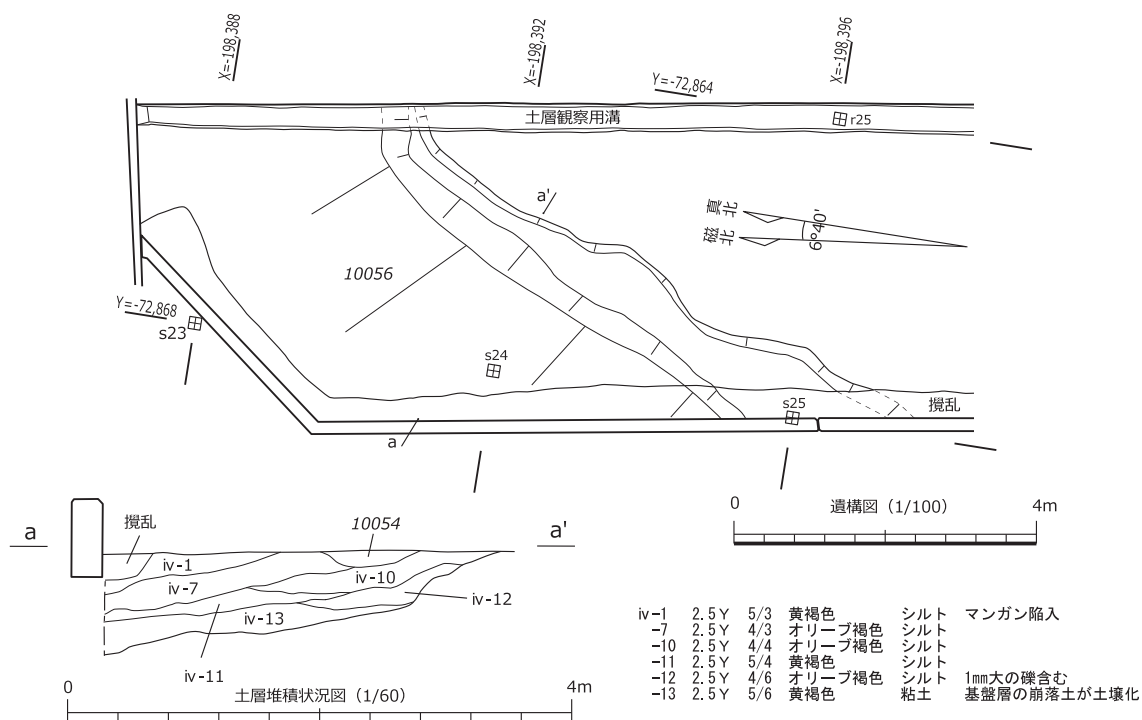


図14 10056溝

(4)10042・10043 土壌の重複状況

10042 が中層遺構、10043 が下層遺構である。10043 が埋没した後に、10042 が掘り込まれている。遺構の時期は、出土遺物より、10042 が弥生時代中期後半、10043 が弥生時代前期後半と考えられる。

10042 土壇（中層遺構）（図 15・17）

検出最大長（南北）1.5 m、深さ 0.6 m の土壇である。平面形は、北北東－南南西方向の隅丸方形を呈する可能性があるが、遺構東半が調査区外となっており、明確ではない。遺構内部から多くの弥生土器が出土した。出土した弥生土器は、若干、弥生時代前期の遺物が混入するが、その主体となる時期は弥生時代中期後半である。高坏口縁部（37・38）、高坏脚部（40・41）、蓋（43・44）、壺頸部（39）等が出土している。

この遺構は、形態や出土遺物から土壇墓であった可能性も考えられるが、全てが破片であり、かつ床面から浮いた状況で出土しているため明確ではない。

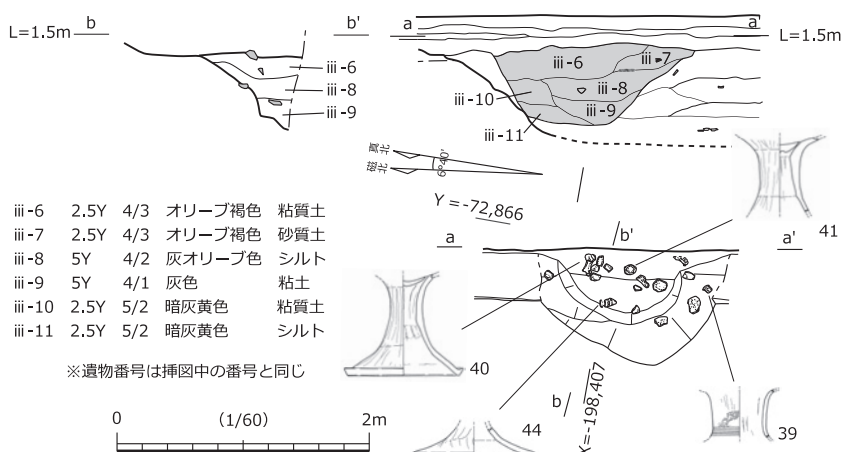


図15 10042土壇

10043 土壇（下層遺構）（図 16・17）

検出最大長（南北）3.9 m、深さ 0.8 m の大型土壇である。東西長 1.5 m を検出しており、それよりも東側は調査区外となるものの、平面形は北北西－南南東方向の楕円形を呈すると考えられる。遺構断面は逆台形状になると考えられるが、底面付近からの湧水が激しく、底面を明確に確認することは困難であった。

遺構内から多くの弥生土器が出土した。3 個体の壺（45・46・47）、大型壺底部（54）、大型壺体部（51）等が出土している。特に 45・46 は通例の壺よりも頸部の径が大きく、47 は口縁部に

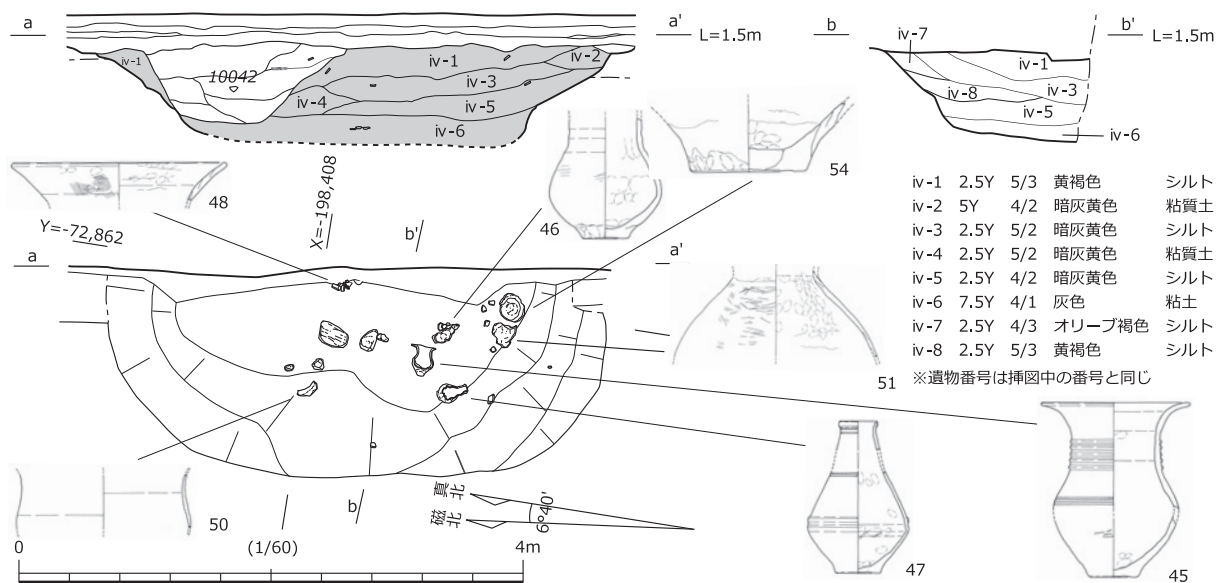


図16 10043土壇

貼付突帯を持ち、体部から頸部・口縁部に近づくにつれて窄まる特徴的な形態を持つ弥生土器である。いずれも弥生時代前期新段階にあたるものであり、この時期に帰属するものと考えられる。また、弥生土器とともに結晶片岩が検出されているが、出土状況に規則性は認められず、遺構の性格は不明である。

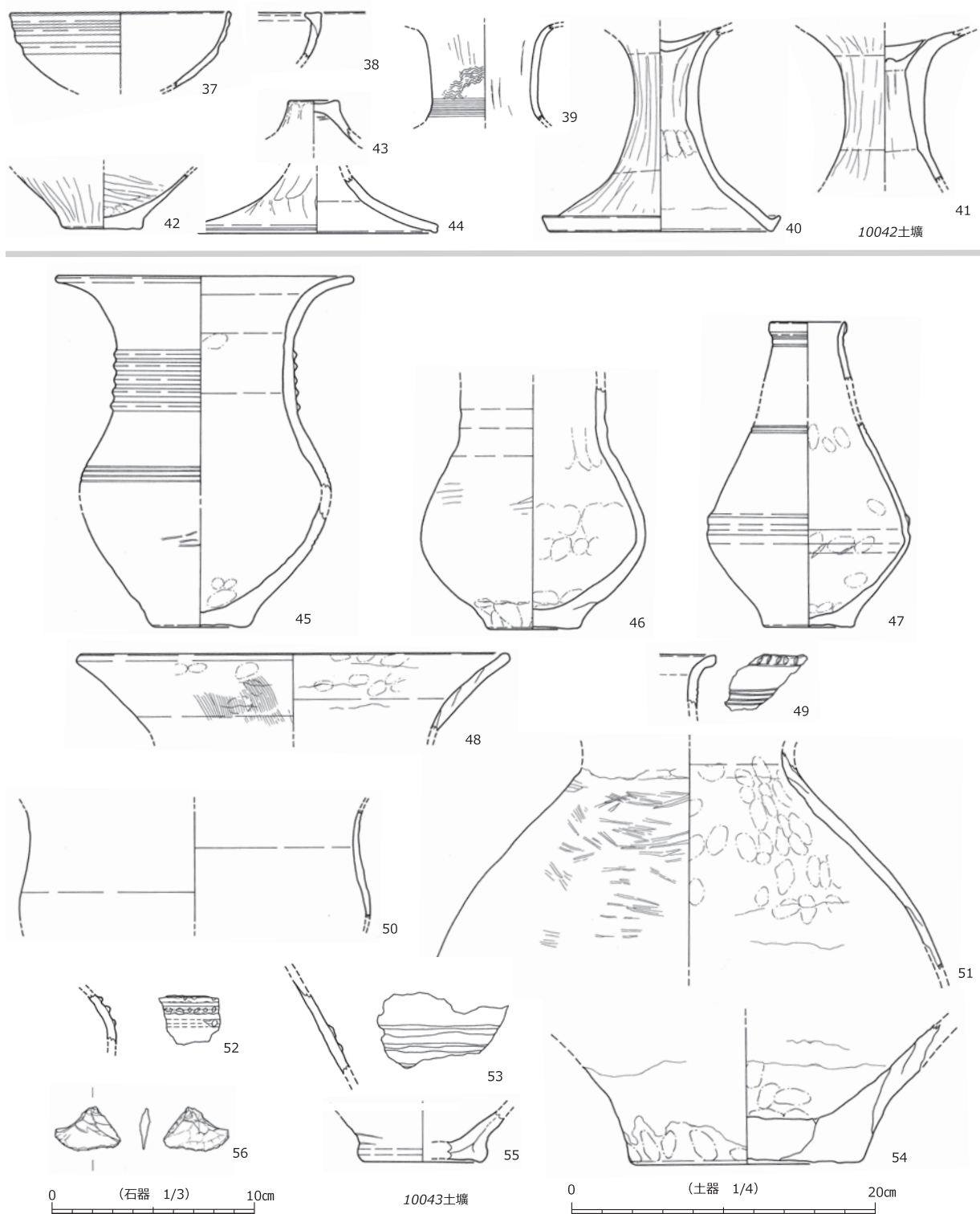


図17 10042土壙・10043土壙 出土遺物

(4) 重複関係のない遺構

10032 溝（上層遺構）（図 18）

北東－南西から南北方向へ方向を変える溝状遺構である。幅 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.15 m を測り、遺構断面は皿状を呈している。その方向と規模から 7 区 7007 に接続すると考えられるが、10 区と 7 区の間で再度、北東－南西へ方向を変えることとなる。

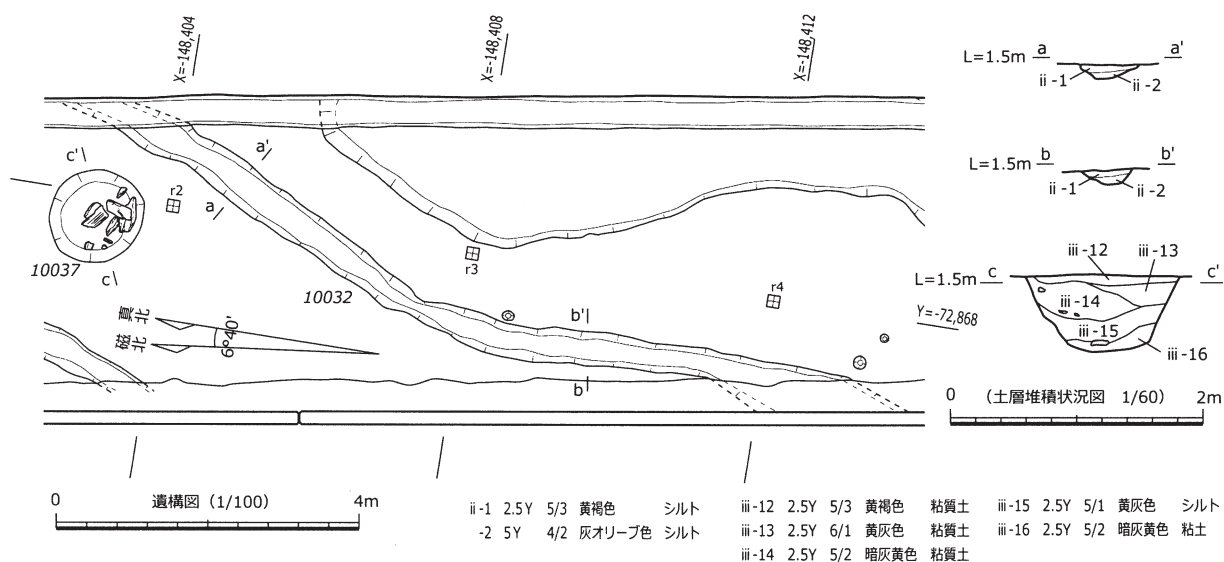


図18 10032溝・10037土壌

10033 溝（上層遺構）（図 19）

多少蛇行するものの、ほぼ南北に延びる溝状遺構である。幅 0.4 m、深さ 0.05 ～ 0.15 m を測り、北に行くほど深さが浅くなる傾向にある。遺構断面形は皿状を呈している。他の上層遺構と同様、遺構上部は後世の水田経営によって削平されている可能性が高い。

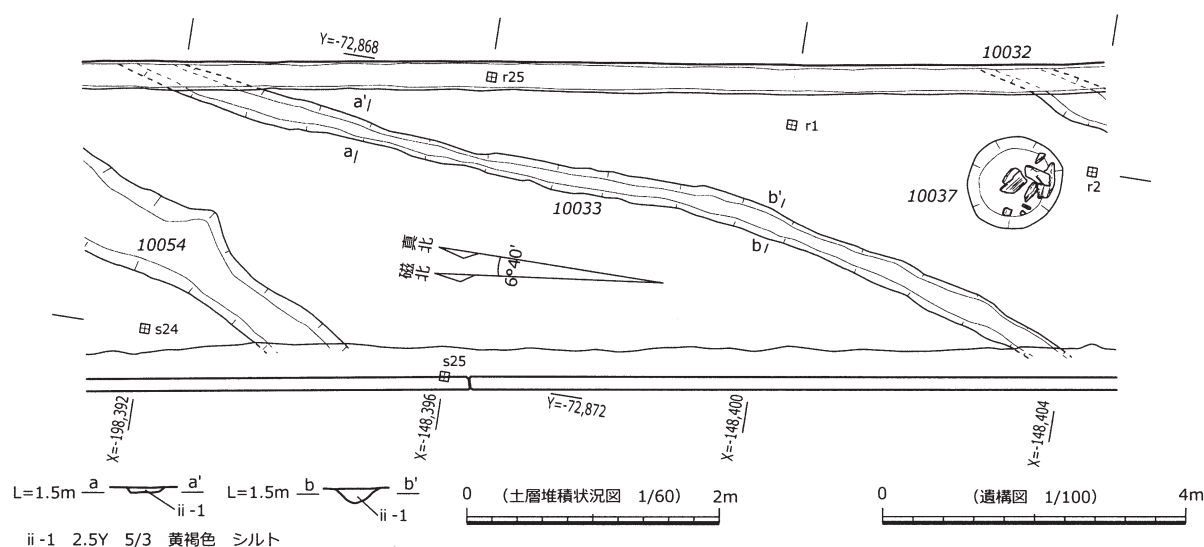


図19 10033溝

2 中世の遺構（最上層遺構）

10024 掘立柱建物跡（図 20）

掘立柱建物跡の一角を検出した。検出したのは東西 1 間、南北 2 間分である。東西の柱間は 1.9m、南北は、南側の柱間が 4.0 m である一方、北側の柱間は 1.4 m で約 1/3 である。北側の 1 間分は建物躯体部ではなく底部等の可能性が考えられる。遺物は出土しなかったため時期は明確でないが、10056 と同様の埋土であることから中世に帰属するものと考えられる。ほぼ南北方向を向く点から条里整備以降と考えられることも矛盾しない。

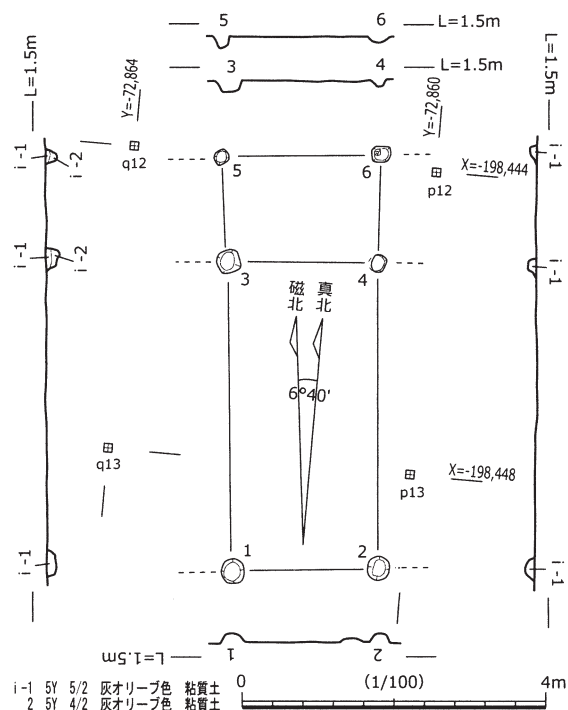


図20 10024掘立柱建物跡

10037 土壙（図 18・21）

直径 1.2 m、深さ 1.1 m を測る土壙である。出土遺物量は少ないが、底面に棒状の結晶片岩が多く堆積していた。この結晶片岩は加工された痕跡はなく、何を目的にこの土壙に入れられていたのかは不明である。瓦器碗片（57・58）が出土している。

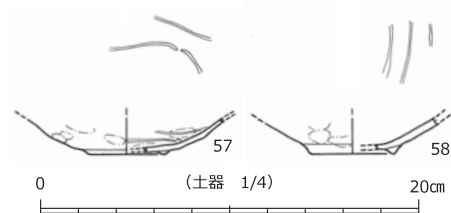


図21 10037溝 出土遺物

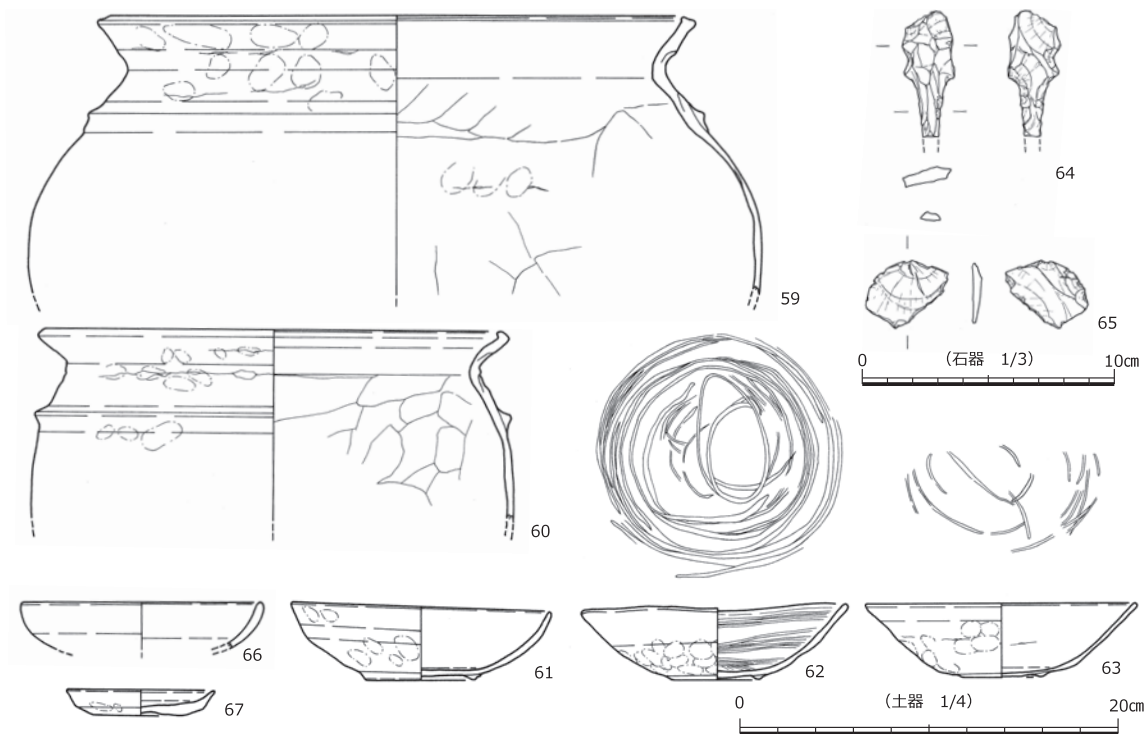


図22 10055溝 出土遺物

10055 溝 (図 13・22)

幅 1.6 ～ 1.7 m、深さ 0.7 m を測る溝状遺構である。断面形は逆台形を呈するが、南側に犬走り状のテラス部を持つ。遺構内からは土釜 (59・60) 瓦器碗 (61 ～ 63) 等が出土した。62・63 の瓦器碗内部には円状暗文が施されている。

この遺構は、出土遺物から 13 世紀後半頃の遺構と考えられる。犬走り状テラスを持ち、その形状から考えて、生活用水を取得することも可能な用水路であった可能性もある。これに接続する遺構は明確には検出されていないが、その位置や帰属時期から 6 区 6037 に接続する可能性がある。

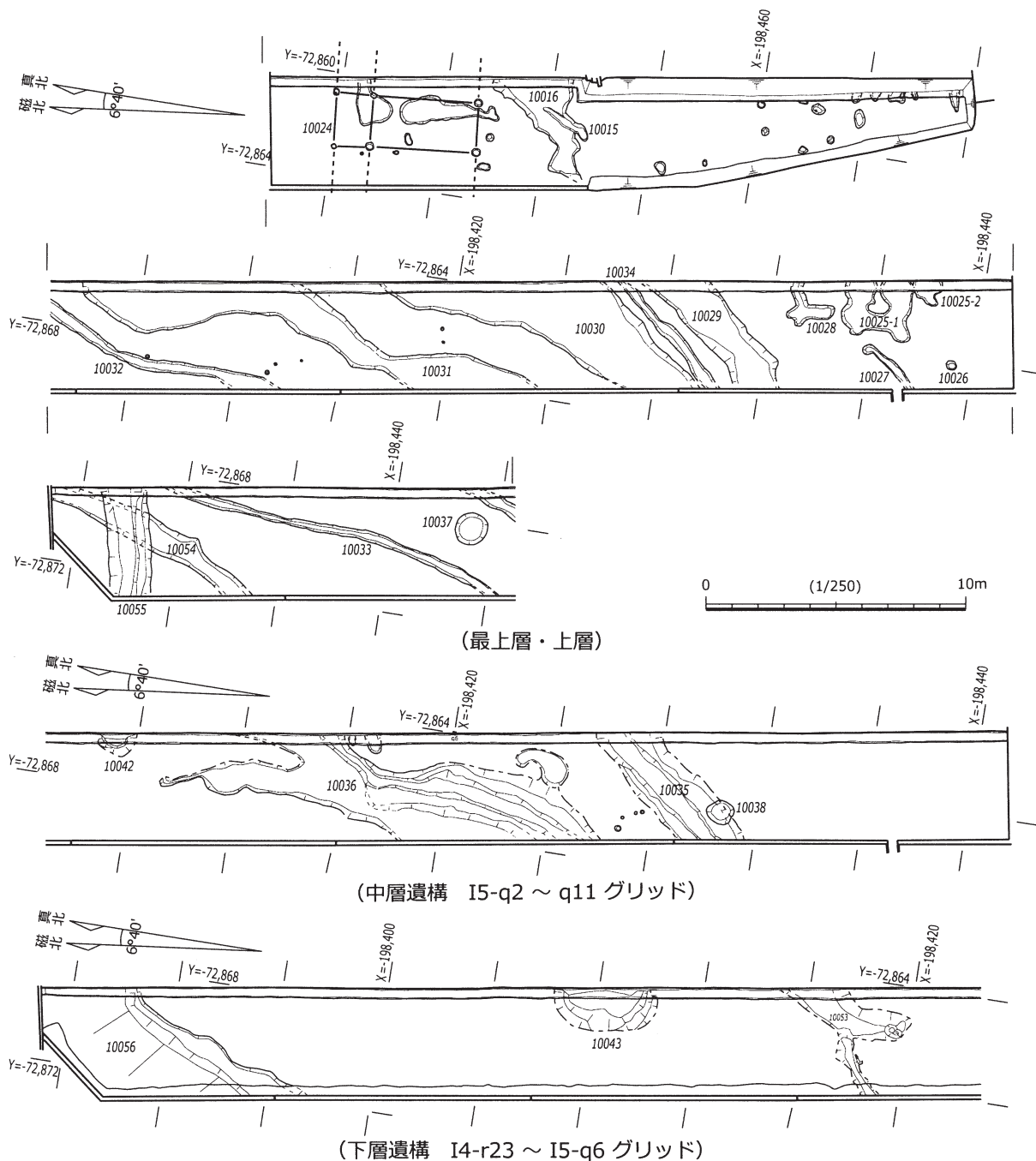
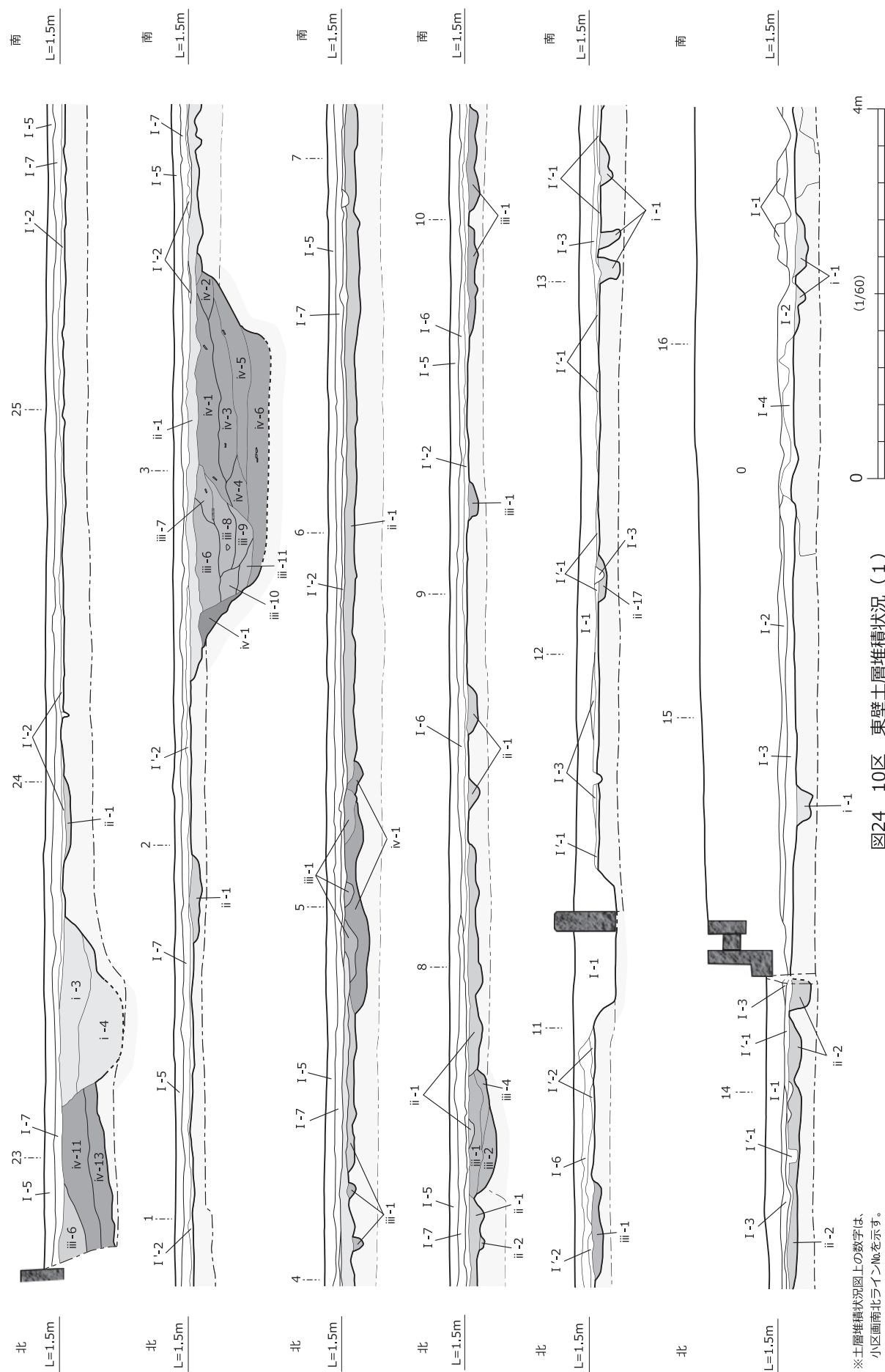


図23 10区 遺構配置図



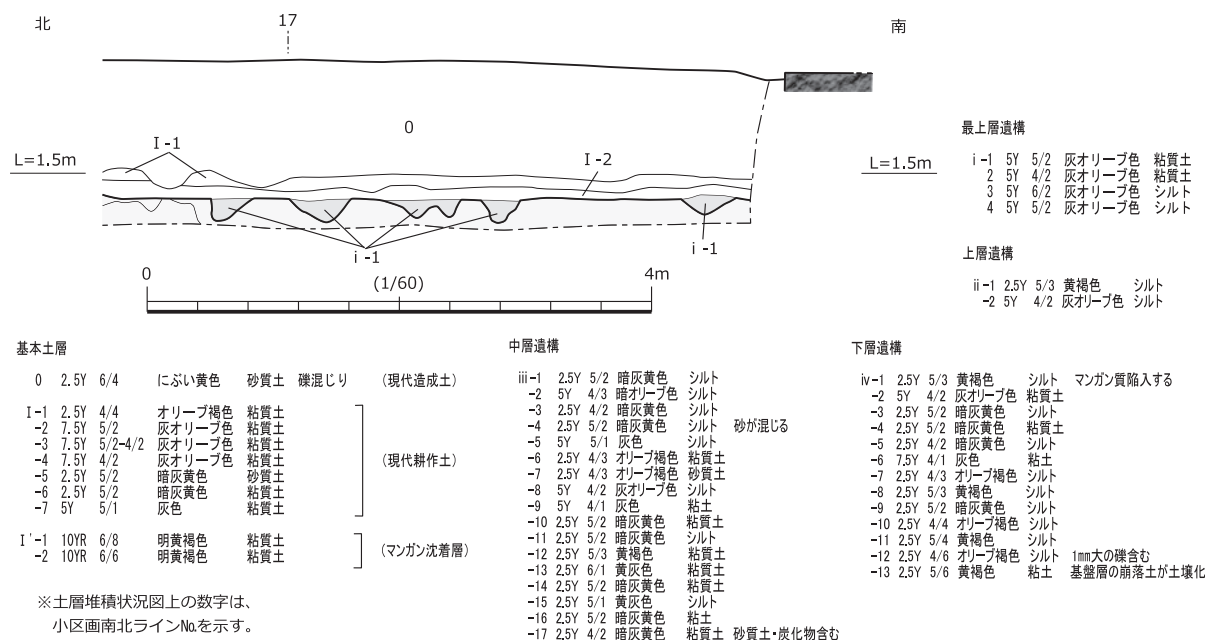


図25 10区 東壁土層堆積状況（2）

3 まとめ

弥生時代の遺構は、ほとんどが溝状遺構であり調査区の南1/3の範囲では確認されず、調査区付近が集落跡の南限であったことを示している。なお、弥生時代の遺構が確認されない範囲では、中世の10024掘立柱建物跡等を検出しており、中世段階では集落範囲が南へ広がったことをうかがわせる。

また、調査の結果、弥生時代の溝状遺構が調査区によって様相が異なる状況が確認されたため報告しておくたい。

調査区は、西から9区、8区、6・7区、10区と配置されているが、6・7区と10区を境として溝状遺構の方向が変化

する傾向にある。また、9区、8区、6・7区西側では、遺構が深く、しっかりした形状をしている一方、6・7区東側では徐々に浅くなる状況がある。10区ではその状況が顕著に表れており、遺構形状もあいまいで溝状遺構というよりは自然流路といった印象が強い。地形から、流路としては北西から南東方向へ流れていたと考えられることから、6・7区付近から下流側については、自然流路を人為的に整備した可能性も考えられる。特に、その可能性が考えられるのは7区7002溝・10区10036溝である。7区中央部で幅1.9m、深さ0.55mの断面U字を呈するが、東側では、10036溝と同様な浅い溝状遺構となっている。それゆえ、10区10036溝は7区7002溝は接続するものと考えられるが、この様子からは、浅い自然流路を10区の途中から人工的に掘削し、7区の中程より人為的に流路を南東 - 北西方向に変更したことがうかがえる。

表2 溝状遺構 遺構名対照表

9・8区	6区	7区	10区
-	6037	-	10055
8001	6039	7001	-
-	6015	7051	10054
8000	6050	7000	10056
8002	-	7002	10036 10035
-	6011	7004	-
8007	-	7007	10032
		7010	10031
		7011	10034 10030
-	-	7012	10029

※調査区を跨る溝状遺構のみを対象として記載している。

出土遺物観察表（1）

遺物 番号	挿図 番号	区画			遺構 番号	遺構 種類	層位	種 類 器 種	口径	器高	残存率	胎土	色 調	特徴・備考
1	6	9区	J5	b9	8000	溝	a層 上面	弥生土器 甕	(16.2)	(1.3)	10%	密 7mm大の赤色酸化粒1 個、3mm以下の白色粒と赤 色酸化粒を少量含む	外面:橙色(2.5YR 6/6) 内面:暗灰黄色(2.5YR 4/2)	反転復元
2	6	9区	J5	b10	8000	溝	a層	弥生土器 壺	—	(2.5)	破片	密 2mm以下の石英・灰色 粒を中量、3mm以下の赤色 酸化粒を少量含む	外面:橙色(2.5YR 6/8) 内面:ぶい黄橙色(10YR 7/4)	全体的に磨減が著しい
3	6	9区	J5	b9	8000	溝	a層 上面	弥生土器 壺or甕	—	(5.2)	破片	密 2mm以下の石英・灰色 粒・黒色粒を中量含む	外面:ぶい黄橙色(10YR 6/4) 内面:ぶい褐色(7.5YR 5/4)	
4	6	9区	I5	y19	8077	溝	上層	弥生土器 壺or甕	—	(4.5)	100%	密 1mm以下の石英・黒色 粒・灰色粒を多量に含む	外面:ぶい黄橙色(10YR 7/3) 内面:ぶい黄橙色(10YR 7/3)	一部反転復元 磨減が著しい
5	6	9区	J5	b10	8079	溝	一括	弥生土器 壺or甕	—	(5.9)	破片	密 5mm以下の片岩・長石・ 石英を多量含む	外面:橙色(7.5YR 6/6) 内面:灰白色(10YR 8/2)	ヘラ描沈線文 弥生時代前期
6	6	9区	J5	b7	8101	溝	1層	弥生土器 壺	(24.4)	(3.2)	破片	密 3mmまでの茶褐色粒・灰 色粒・石英を多量含む	外面:灰色(N 4/0) 内面:橙色(7.5YR 6/6)	反転復元 磨減・剥離が著しい 弥生時代前期新段階
7	6	9区	J5	b7	8101	溝	1層	弥生土器 壺	(22.0)	(3.3)	破片	密 1～4mm大の黒色粒・灰 色粒・白色粒・赤色酸化粒を 中量含む	外面:橙色(7.5YR 6/6) 内面:ぶい褐色(7.5YR 6/4)	反転復元 弥生時代前期新段階
8	6	9区	J5	b7	8101	溝	1層	弥生土器 甕	—	(3.8)	破片	密 1～6mmまでの石英・灰 色粒・褐色粒を多量含む	外面:ぶい黄橙色(10YR 7/2) 内面:ぶい黄橙色(10YR 7/3)	
9	6	9区	J5	b7	8101	溝	1層	弥生土器 甕	—	(3.3)	100%	密 7mm大の黒色小石1 個、4mm以下の石英・灰色 粒・黒色粒を多量に含む	外面:浅黄褐色(10YR 8/3) 内面:灰黄褐色(10YR 5/2)	一部反転復元 磨減が著しい
10	6	9区	J5	b7	8101	溝	1層	弥生土器 壺or甕	—	(3.6)	20%	密 3mm以下の石英を多量 に含む	外面:明褐色(7.5YR 5/6) 内面:橙色(5YR 6/6)	反転復元
11	6	9区	J5	b7	8002	溝	4・5層	弥生土器 壺	17.6	(10.9)	50%	密 10mm大の石英1個、 3mmまでの石英・褐色粒・灰 色粒を多量含む	外面:ぶい褐色(7.5YR 7/4) 内面:灰黄色(2.5Y 7/2)	一部反転復元 弥生時代前期新段階
12	6	9区	J5	b7	8002	溝	4・5層	弥生土器 壺	(17.4)	(7.9)	50%	密 3mm以下の白色粒・黒 色粒・灰色粒を多量含む	外面:灰白色(10YR 8/2) 内面:浅黄色(2.5Y 7/3)	一部反転復元 内面磨減・剥離が著しい 弥生時代前期新段階
13	6	9区	J5	—	8002	溝	排土	弥生土器 壺	—	(5.5)	10%	密 3mm以下の石英・長石・ 赤色酸化粒を多量含む	外面:橙色(5YR 7/6) 内面:橙色(5YR 7/6)	反転復元 外面一部黒斑あり 弥生時代前期
14	6	9区	J5	b7	8002	溝	4・5層	弥生土器 壺	—	(10.0)	10%	密 9mm大の片岩2個、1～ 4mm大の灰色粒・黒色粒・白 色粒を多量含む	外面:明赤褐色(5YR 5/6) 内面:明赤褐色(5YR 5/6)	反転復元 磨減・剥離が著しい 弥生時代前期
15	6	9区	J5	a7 b7	8002	溝	2層 4・5層	弥生土器 壺	—	(13.4)	20%	密 3mm以下の白色粒・黒 色粒・灰色粒を多量含む	外面:ぶい黄褐色(10YR 5/4) 内面:黄灰色(2.5Y 6/1)	反転復元 外面黒斑あり 内面煤付着 弥生時代前期
16	6	9区	J5	c6	8002	溝	2層	弥生土器 甕	—	(8.1)	10%	密 4mm以下の石英・褐色 粒を多量含む	外面:灰白色(2.5Y 7/2) 内面:橙色(7.5YR 7/8)	反転復元 磨減・剥離が著しい 弥生時代前期
17	6	9区	J5	b7	8002	溝	2層	弥生土器 壺	—	(5.75)	破片	密 1～4mm大の石英・黒色 粒を多量含む	外面:浅黄色(2.5Y 7/3) 内面:淡黄色(2.5Y 8/3)	磨減が著しい 弥生時代前期後半
18	6	9区	J5	c7	8002	溝	2層	弥生土器 壺or甕	—	(5.7)	20%	密 5～15mm大の石英・片 岩を少量、5mm以下の石英・ 片岩・黒色粒を多量含む	外面:橙色(7.5YR 6/6) 内面:橙色(7.5YR 6/6)	反転復元
19	9	10区	I5	q9	10029	溝	ii層	弥生土器 壺	—	(4.8)	破片	密 6mm大の片岩1個、 3mm以下の石英・長石・片岩 を多量含む	外面:浅黄色(2.5Y 7/3) 内面:橙色(7.5YR 7/6)	磨減・剥離が著しい 弥生時代前期～中期
20	9	10区	I5	p8 q8	10029	溝	ii層	弥生土器 壺	—	(2.3)	破片	緻密 3mm大の石英・赤色 酸化粒と1mmまでの黒色粒 を少量含む	外面:浅黄褐色(10YR 8/3) 内面:黒褐色(10YR 2/2)	弥生時代中期
21	9	10区	I5	p8 q8	10029	溝	ii層	弥生土器 壺	—	(2.0)	20%	緻密 3mmまでの石英・赤色 酸化粒を中量、1mm以下の 石英・黒色粒を多量に含む	外面:黒褐色(2.5Y 3/1) 内面:ぶい黄褐色(10YR 7/2)	反転復元 外面黒斑あり
22	9	10区	I5	q7 q8	10030	溝	ii層	弥生土器 甕	—	(1.0)	破片	密 5mm大の褐色小石1 個、2mm以下の白色粒を微 量含む	外面:ぶい黄褐色(10YR 6/4) 内面:灰黄色(2.5Y 7/2)	口縁部に刻目 弥生時代前期
23	9	10区	I5	q7 q8	10030	溝	ii層	打製石器	2.85×(2.2)		75%	頁岩	灰色(N 4/0)	
24	9	10区	I5	q8	10035	溝	iii層	弥生土器 壺	(10.8)	(3.2)	20%	密 3mmまでの灰色粒・黒色 粒・赤色酸化粒を多量に含む	外面:ぶい黄褐色(10YR 6/4) 内面:明赤褐色(5YR 5/6)	弥生時代中期
25	9	10区	I5	q8	10035	溝	iii層	弥生土器 甕	—	(7.0)	破片	密 5mmまでの石英・黒色 粒・褐色粒を多量に含む	外面:暗灰黄色(2.5Y 5/2) 内面:浅黄色(2.5Y 7/3)	弥生時代前期後半から中段階 紀伊型甕
26	9	10区	I5	q8	10035	溝	iii層	弥生土器 壺	—	(6.1)	破片	粗 2mm以下の白色粒・灰 色粒・赤色酸化粒を多量に含 む	外面:明赤褐色(5YR 5/6) 内面:灰白色(10YR 8/2)	外面磨減が著しい
27	9	10区	I5	p7	10035	溝	iii層	弥生土器 壺or甕	—	(2.2)	80%	密 5mm以下の石英・黒色 粒を多量に含む	外面:黄灰色(2.5Y 4/1) 内面:灰白色(2.5Y 8/2)	反転復元
28	9	10区	I5	p7 p8	10035	溝	iii層	弥生土器 壺or甕	—	(2.5)	10%	密 3mm以下の石英を多量 に含む	外面:灰白色(2.5Y 8/2) 内面:黄灰色(2.5Y 5/1)	反転復元 内面磨減が著しい
29	9	10区	I5	q8	10038	土壌	iv層	弥生土器 壺	—	(4.2)	破片	緻密 3mmまでの石英・黒色 粒を多量に含む	外面:ぶい黄褐色(10YR 6/3) 内面:灰黄色(2.5Y 7/2)	2条の貼付突帯に刻目 弥生時代前期新段階
30	9	10区	I5	q8	10038	土壌	iv層	弥生土器 壺	—	(3.0)	破片	緻密 1mm以下の石英・褐 色粒と金雲母の微粒を多量 に含む	外面:黒褐色(2.5Y 3/1) 内面:灰黄褐色(10YR 6/2)	
31	12	10区	I5	q2	10031	溝	ii層	弥生土器 甕	(22.0)	(7.8)	破片	粗 3mm以下の石英・褐色 粒を多量に含む	外面:灰オリーブ色(5Y 6/2) 内面:灰白色(7.5Y 7/1)	反転復元 磨減が著しい 紀伊型甕
32	12	10区	I5	q2 q3	10031	溝	ii層	弥生土器 壺	—	(3.9)	破片	密 1～6mmまでの石英・長 石を中量含む	外面:灰白色(2.5Y 8/1) 内面:灰黄褐色(10YR 6/2)	反転復元
33	12	10区	I5	q2	10031	溝	ii層	弥生土器 壺or甕	—	(5.0)	25%	密 1mmまでの石英を微量、 1mm以下の白色微粒・灰色 微粒を多量含む	外面:灰白色(2.5Y 8/2) 内面:灰白色(2.5Y 8/1)	反転復元 磨減が著しい 上底状の底 部 弥生時代前期
34	12	10区	I5	—	10036	溝	iii層	弥生土器 壺	—	(6.9)	破片	密 2mm大の黒色粒を多量 に含む	外面:ぶい黄褐色(10YR 6/3) 内面:灰黄褐色(10YR 4/2)	ヘラ描沈線文 弥生時代前期新段階
35	12	10区	I5	q5	10053	溝	iv層	弥生土器 壺	—	(3.8)	破片	密 2mm以下の白色粒・灰 色粒・褐色粒を中量含む	外面:橙色(7.5YR 6/6) 内面:黒褐色(2.5YR 3/1)	
36	12	10区	I5	q5	10053	溝	iv層	弥生土器 壺	—	(4.1)	破片	やや粗 4mm以下の白色・ 灰色粒を少量含む	外面:明褐色(7.5YR 5/6) 内面:ぶい黄褐色(10YR 5/4)	貼付突帯に刻目 弥生時代前期新段階
37	17	10区	I5	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 高坏	(14.4)	(5.0)	10%	粗 3mm以下の石英・長石・ 褐色粒を多量に含む	外面:橙色(7.5YR 7/6) 内面:灰色(5Y 6/1)	反転復元 磨減が著しい 弥生時代中期後半
38	17	10区	I5	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 高坏	—	(3.1)	破片	密 5mm大の石英2個、 2mm以下の石英を少量、 1mm以下の赤色酸化粒を多 量含む	外面:浅黄褐色(7.5YR 8/3) 内面:灰白色(10YR 8/1)	弥生時代中期後半

出土遺物観察表 (2)

遺物 番号	挿図 番号	区画			遺構 番号	遺構 種類	層位	種 類 器 種	口径	器高	残存率	胎土	色調	特徴・備考
39	17	10区	15	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 壺	—	(6.4)	10%	粗 2mm以下の石英を微量・1mm以下の石英・赤色酸化粒を多量含む	外面:橙色(5YR 6/6) 内面:橙色(2.5Y 6/6)	反転復元 弥生時代中期後半
40	17	10区	15	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 高坏	—	(13.4)	55%	やや粗 3mm以下の石英・長石・赤色酸化粒を多量含む	外面:橙色(2.5Y 7/6) 内面:橙色(2.5Y 7/6)	一部反転復元 弥生時代中期後半
41	17	10区	15	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 高坏	—	(10.0)	100%	密 1mm以下の石英・黒色粒を多量、6mmまでの片岩を微量含む	外面:灰黄色(2.5Y 7/2) 内面:灰黄色(2.5Y 7/2)	一部反転復元 外面磨減が著しい
42	17	10区	15	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 壺	—	(3.7)	100%	密 2mm以下の石英・長石・赤色酸化粒を多量に含む	外面:灰黄色(2.5Y 7/2) 内面:黄灰色(2.5Y 4/1)	一部反転復元 弥生時代中期後半
43	17	10区	15	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 蓋	摘み部 3.2	(2.9)	100%	密 2mm以下の白色粒と黒褐色粒を中量含む	外面:灰黄褐色(10YR 6/2) 内面:灰黄褐色(10YR 6/2)	一部反転復元
44	17	10区	15	q2	10042	土壌	iii層	弥生土器 高坏	—	(3.8)	25%	密 1mm以下の石英・灰色粒を中量含む	外面にぶい黄褐色(10YR 6/3) 内面にぶい黄褐色(10YR 7/3)	反転復元 底部煤付着
45	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺	(19.3)	(23.0)	40%	密 3mm以下の灰色粒・白色粒・黒色粒を多量に含む	外面:灰黄褐色(10YR 4/2) 内面:浅黄色(2.5Y 7/3)	一部反転・合成復元 通例の壺に比べ頸部径が大きい 弥生前期新段階
46	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺	—	(15.9)	35%	密 5mm以下の白色粒と石英・金雲母を多量含む	外面にぶい黄褐色(10YR 6/3) 内面にぶい黄褐色(10YR 7/3)	反転復元 通例の壺に比べ頸部径が大きい 弥生時代前期新段階
47	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺	(4.8)	(20.0)	45%	密 2mm以下の白色粒・灰色粒・黒色粒を多量含む	外面:橙色(7.5YR 6/6) 内面:橙色(7.5YR 6/6)	一部反転・合成復元 口縁が広がらない 磨減が著しい 弥生時代前期新段階
48	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺	(27.8)	(5.2)	10%	密 4mmまでの灰色粒・黒色粒・白色粒を多量、1mm以下の赤色酸化粒を少量含む	外面:灰黄色(2.5Y 6/2) 内面:橙色(5YR 6/6)	反転復元
49	17	10区	15	q2	10043	土壌	iv層	弥生土器 甕	—	(3.6)	破片	密 4mmまでの石英・白色粒・灰色粒を少量含む	外面にぶい黄褐色(10YR 6/3) 内面にぶい黄褐色(10YR 6/3)	口縁端部に刻目 弥生時代前期
50	17	10区	15	q2 q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 甕	—	(7.3)	10%	粗 5mmまでの石英・片岩・灰色粒・褐色粒を多量含む	外面:黄灰色(2.5Y 6/1) 内面:黄灰色(2.5Y 6/1)	反転復元 紀伊型甕か
51	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 大型壺(体部)	—	(14.5)	20%	密 1～5mmまでの石英・黒色粒・灰色粒・白色粒を多量含む	外面:黄褐色(2.5Y 5/3) 内面:灰白色(2.5Y 8/2)	反転復元 磨減が著しい
52	17	10区	15	q2	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺	—	(3.2)	破片	密 2mm大の石英1個・1mm以下の石英・赤色酸化粒を多量含む	外面:灰黄色(2.5Y 6/2) 内面:黒褐色(2.5Y 3/1)	河内地域からの搬入品
53	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺	—	(6.2)	破片	密 6mm以下の石英・灰色粒を多量含む	外面:浅黄褐色(7.5Y 8/3) 内面:灰黄色(2.5Y 6/2)	磨減が著しい
54	17	10区	15	q3	10043	土壌	iv層	弥生土器 大型壺(底部)	—	(8.9)	100%	粗 5mm大の灰色小石を少量、1～4mm大の石英・灰色粒・白色粒・黒色粒を多量含む	外面:明褐色(7.5YR 5/6) 内面:灰黄色(2.5Y 7/2)	一部反転復元 底部種子圧痕あり
55	17	10区	15	q2	10043	土壌	iv層	弥生土器 壺or甕	—	(3.4)	10%	密 5mmまでの石英・黒褐色粒を多量に含む	内面にぶい橙色(7.5YR 6/4) 外面にぶい橙色(7.5YR 6/4)	反転復元 内面磨減が著しい
56	17	10区	15	q2	10043	土壌	iv層	打製石器 スクレイパー	2.15×3.25		100%	サヌカイト	灰白色(N 8/1)	—
57	21	10区	15	r1	10037	土壌	i層	瓦器 碗	—	(1.9)	25%	密 1mm以下の黒色粒を微量含む	外面:灰色(5Y 6/1) 内面:灰オリーブ色(5Y 5/2)	反転復元 内面に暗文の痕跡 13世紀後半
58	21	10区	15	r1	10037	土壌	i層	瓦器 碗	—	(1.9)	25%	密 殆ど砂粒はみられない	外面:暗灰色(N 3/0) 内面:灰色(N 4/0)	反転復元 内面に暗文の痕跡 13世紀後半
59	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	土師質土器 土釜	(30.2)	(14.7)	20%	密 3mmまでの白色粒を少量含む	外面:灰黄褐色(10YR 5/2) 内面:灰黄褐色(10YR 6/2)	反転復元 外面突帯付近、内面口縁付近に煤付着 13世紀後半
60	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	土師質土器 土釜	(24.0)	(10.1)	20%	密 1mm以下の灰色微粒・白色微粒を多量含む	外面にぶい黄褐色(10YR 5/3) 内面にぶい黄褐色(10YR 7/3)	反転復元 外面斑に煤付着 13世紀後半
61	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	瓦器 碗	13.6	4.0	95%	やや粗 4mm大の片岩を微量、1mmまでの白色微粒・灰色微粒を多量含む	外面:黄灰色(5Y 4/1) 内面:黄灰色(5Y 5/1)	磨減が著しい 13世紀後半
62	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	瓦器 碗	13.9	4.0	100%	緻密 2mmまでの白色粒を微量含む	外面:灰白色(5YR 7/1) 内面:灰白色(5YR 7/1)	内面に渦状暗文 13世紀後半
63	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	瓦器 碗	(14.2)	3.9	50%	密 1mm以下の黒色・白色の極微粒を微量含む	外面:灰色(5Y 5/1) 内面:灰色(5Y 5/1)	一部反転復元 内面に渦状暗文の痕跡 13世紀後半
64	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	打製石器 石錐	(4.9)×0.8～2.0		90%	サヌカイト	灰白色(7.5Y 7/1)	外面やや風化
65	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	打製石器 スクレイパー	2.7×3.3		100%	サヌカイト	暗灰色(N 3/0)	
66	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	土師質土器 皿	(12.6)	(12.5)	13%	密 1mm以下の赤色酸化粒を微量含む	外面:橙色(5YR 6/6) 内面:橙色(5YR 6/6)	反転復元
67	22	10区	14	r23	10055	溝	i層	土師質土器 小皿	7.8	1.4	75%	密 1mm以下の赤色酸化粒を微量含む	外面:橙色(5YR 6/6) 内面:橙色(5YR 6/6)	磨減が著しい

8002溝



遺物出土状況



土層堆積状況



番号は遺物番号を示す

遺物出土状況 拡大

8008溝



完掘状況

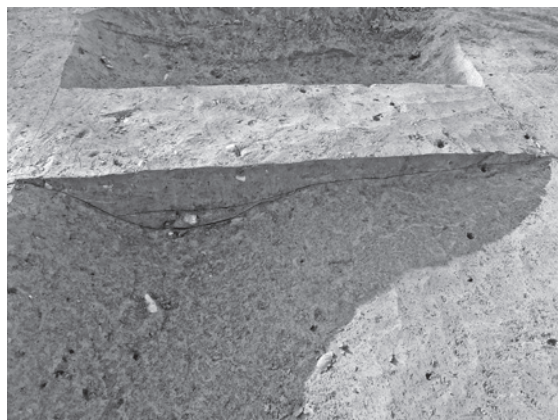


土層堆積状況

8101溝

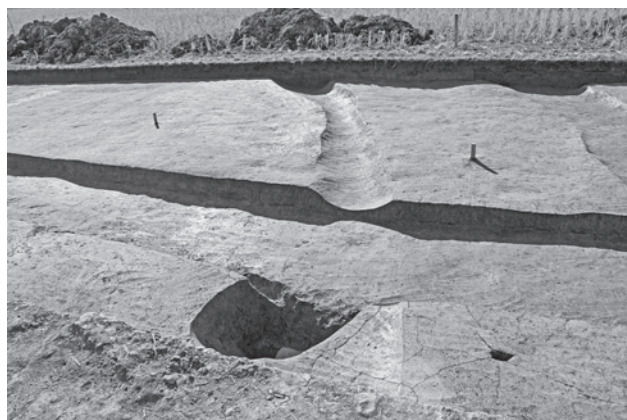


完掘状況



土層堆積状況

8079溝



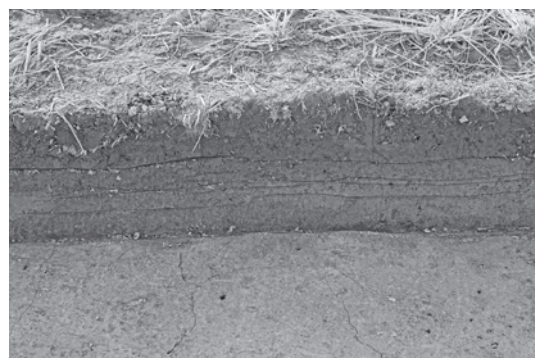
完掘状況



土層堆積状況



完掘状況 北より



西壁土層堆積状況

上層（弥生時代中期）の溝状遺構



10029溝 完掘状況



10029溝 土層断面



10030溝 土層断面



10030溝 完掘状況



10031溝 完掘状況



10032溝 完掘状況



10032溝 土層断面（南側）



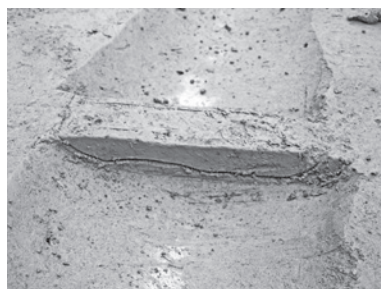
10032溝 土層断面（北側）



10033溝 完掘状況



10033溝 土層断面（南側）



10033溝 土層断面（北側）



10034溝 完掘状況



10029溝・10030溝・10034溝 完掘状況



10054溝 完掘状況

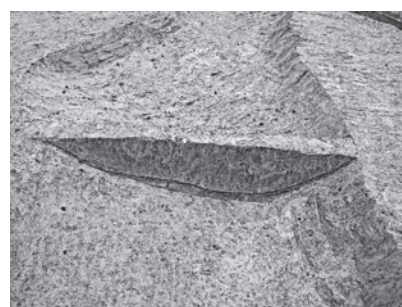
中層（弥生時代中期）溝状遺構



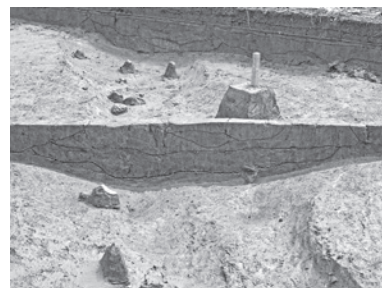
10036 完掘状況



10035 完掘状況



10054溝 土層断面



10035溝 土層断面

下層（弥生時代前期）溝状遺構



10036溝 土層堆積状況



10036溝 完掘状況

10042・10043土壇



土層堆積状況

10042土壇



完掘状況・土層断面

10043 土壇



完掘状況



遺物出土状況

番号は遺物番号を示す

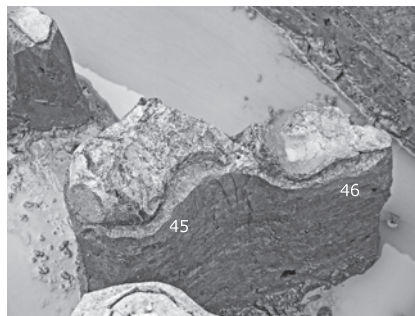
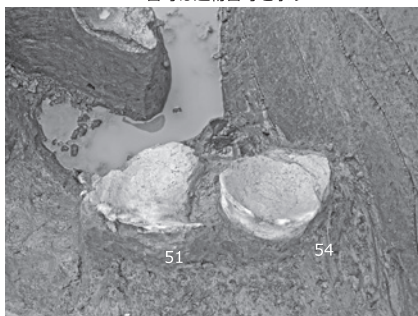
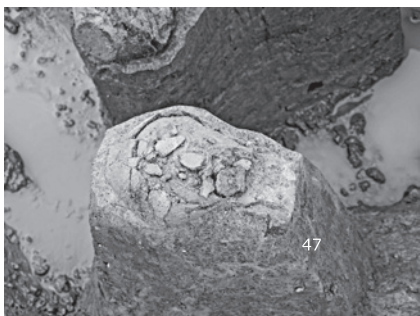


遺物出土状況



遺物出土状況 拡大

番号は遺物番号を示す



遺物出土状況 拡大

上層・中層 溝状遺構の重複状況

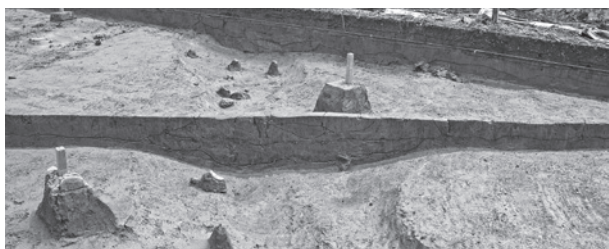


図8 a-a'

10029・10030・10034 完掘状況

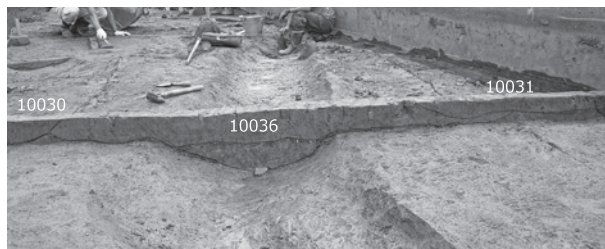


図10 a-a'

10030・10031・10036 重複状況



10024掘立柱建物

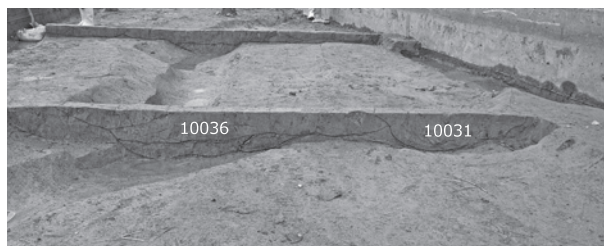
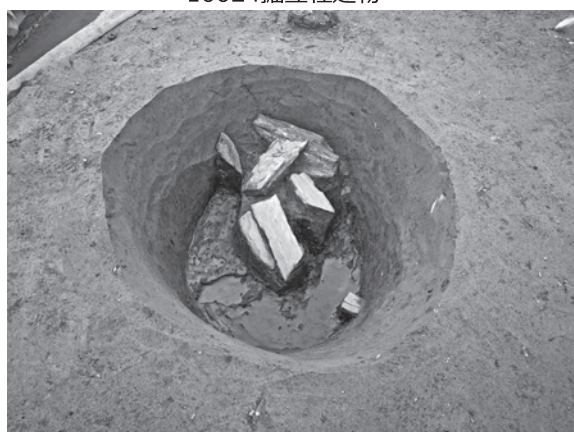


図10 b-b'

10036・10031 重複状況

最上層（中世）の遺構



10037土坑 完掘状況



10055溝 完掘状況

完掘状況



I5-p11・q11~o18

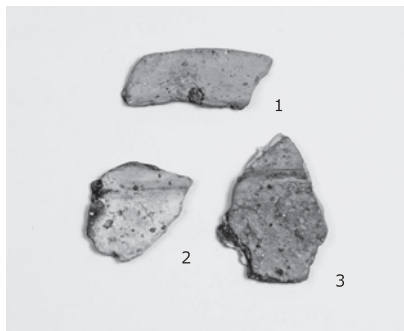


I4-r22~I5-q3・r3

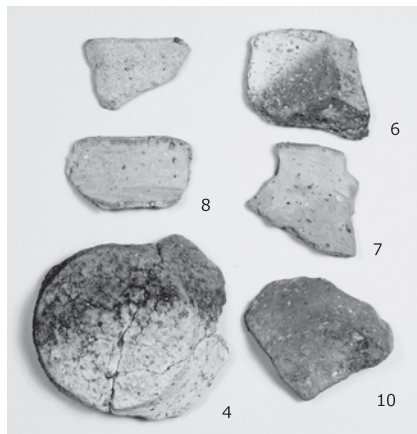
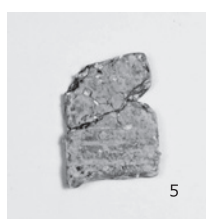


I5-q1・r1~p11・q11

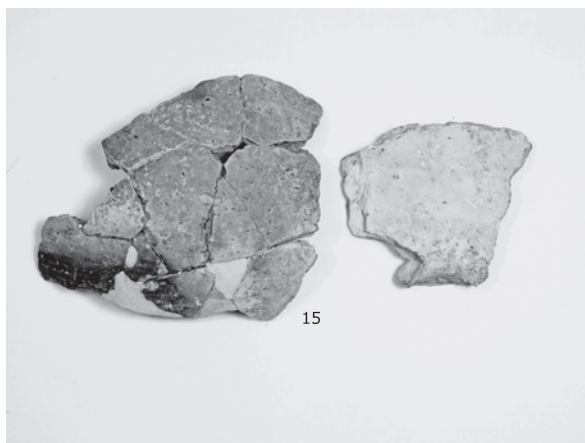
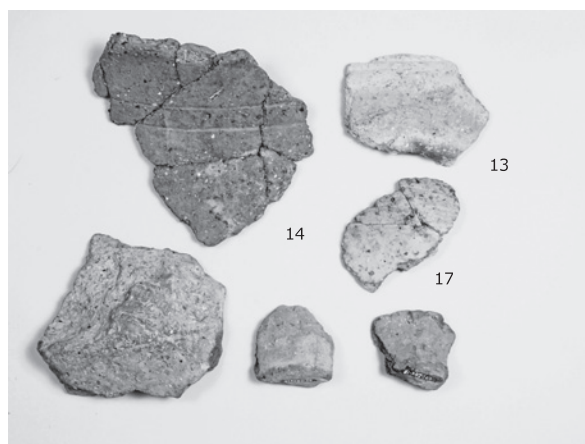
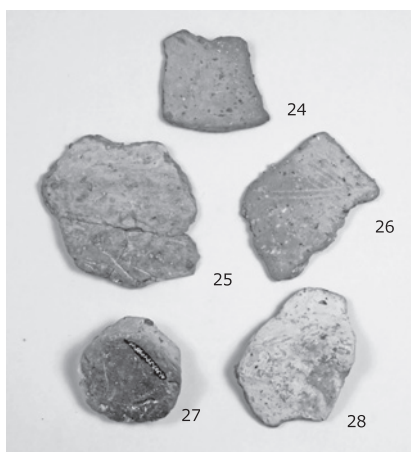
8000溝



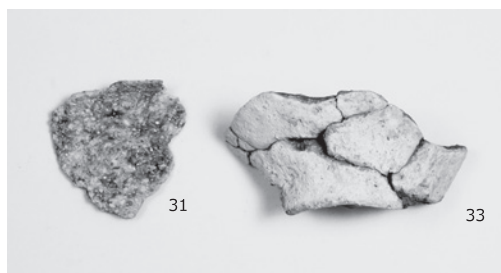
8101溝



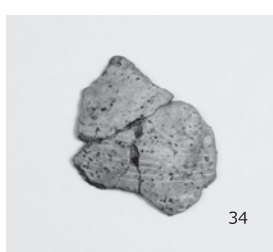
8002溝



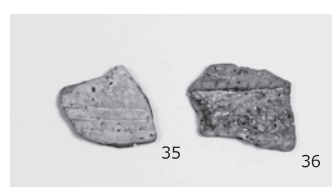
10031溝



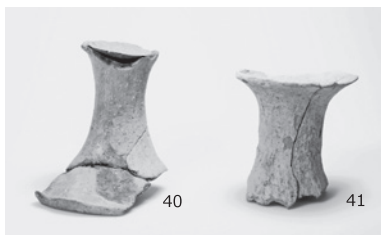
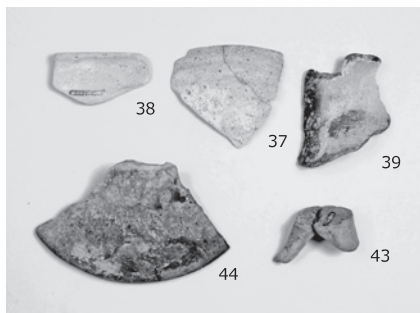
10036溝



10053溝



10042土墳



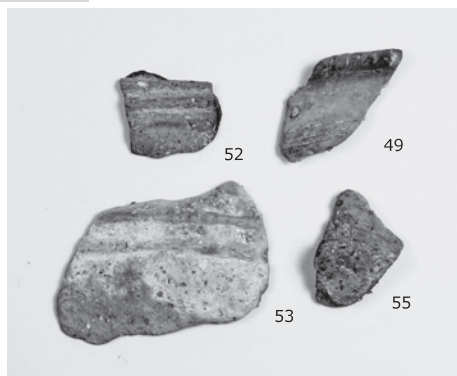
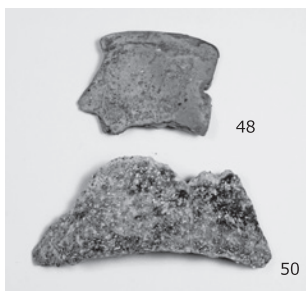
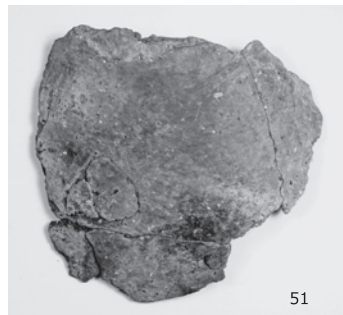
10043土墳



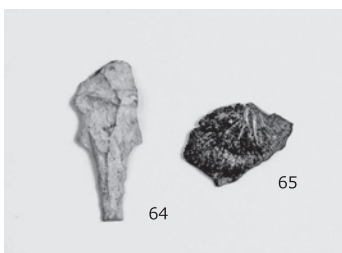
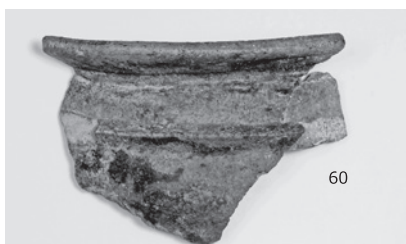
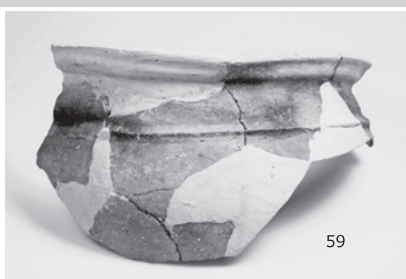
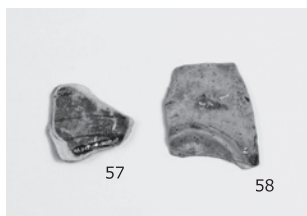
45 口縁・体部



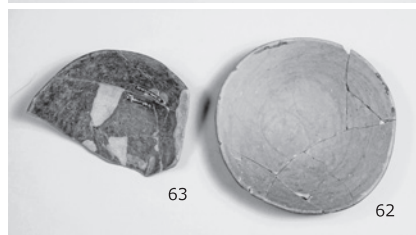
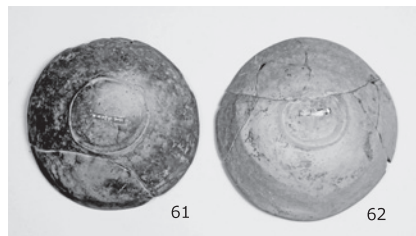
45 底部



10037溝



10055溝



報告書抄録

[illegible]

神前遺跡

—秋月海南線道路改良に伴う発掘調査報告書—

2014 年 8 月 19 日

編集・発行 公益財団法人 和歌山県文化財センター

印刷・製本 株式会社 協和